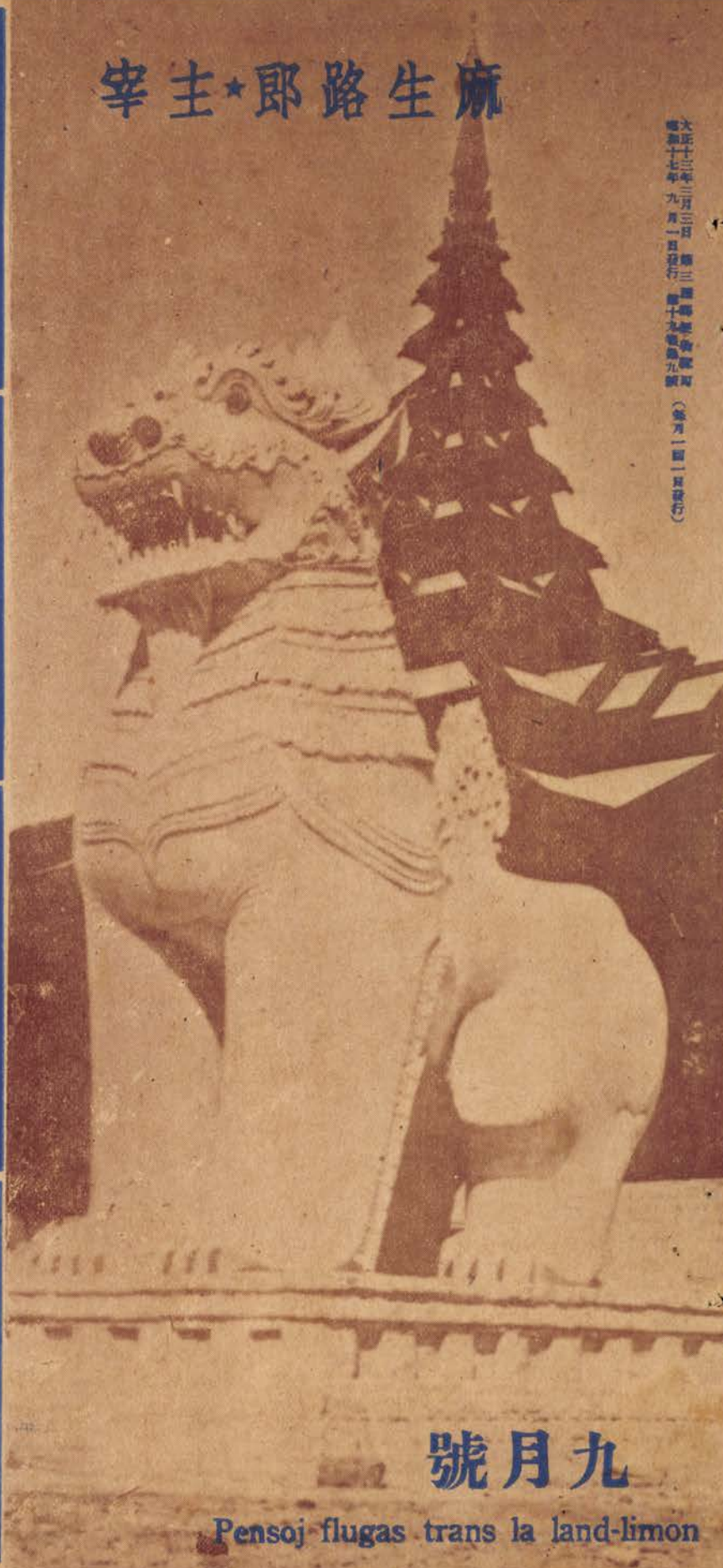
川柳の雑誌

麻生路郎★主宰

大正十三年三月三日 第三種郵便物認可
昭和十七年九月一日發行 第十九卷第九號 (毎月一回一日發行)



九月號

Pensoj flugas trans la land-limon

ニキビ

りとびきに

美顔水

蚤・蚊・南京虫等の毒虫でカユい時！

然ういふ時にも不思議なほどよく効きますので、殊に小さいお子方のある御家庭などには殊の外重寶がられてゐます。

★ニキビ吹出物に非常によく効くので大評判の薬です。ニキビや吹出物でお困りの方に大きな喜びの糧！ ゼヒお勸したい薬です！

是非此薬	吹出物に	ニキビ・

東京・大阪

桃谷順天館

叩き行けば隣の蟇蟲（句並撮影）福井哲

不朽洞句抄

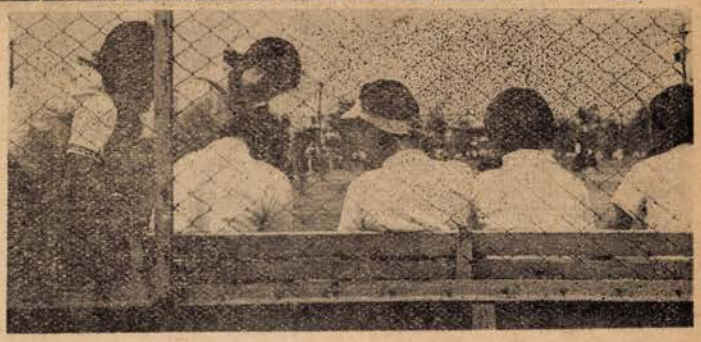
麻生路郎

どの兵も後妻の父に似て
銃後芽出度し悠々と御安産
人生は西陽で鰯焼く如し
　高野の繪圖
峯寺々あいたところは雲を描き
　書齋の窓
爆撃は斯うもあらうか雲の峰

川柳雜誌　九月號目次

表紙（マンダレイの寺）……麻生路郎……（一）
柳祖に告ぐ……福井哲……（一）
川柳寫眞（街の秋）……麻生路郎……（八）
川柳の近畿　大和篇（七）……麻生路郎……（一〇）
あべこべの問題……澤田四郎作……（一〇）
武玉川研究（二三）……梅本蹠山　森東魚　蛭子省二……（一二）
東京耳目……甫田山雨樓……（一四）
初等川柳講座（八）……麻生路郎……（一八）
文字の國の新聞から……Z　Z……（一三）
川世界史（一七）……戶田孤蓬……（一三）
柳草木徒然……西田艸樂……（一三）
漫筆　銃後の匂ひ……路郎生……（一三）
身邊雜記……安川久留美……（一五）
氣違ひ踊り……夷一笑……（一二）
川柳解題と例句……麻生路郎……（一四）
兵隊と手紙……火森風來子……（一三）
路郎門の柳星集まる（不朽洞會總會）……玲之介記……（一六）
窓―その一（一〇）……その二（一〇）……その三（一〇）
★
不朽洞句抄……麻生路郎……（一）
近作柳樽……麻生路郎選……（一四）
川柳塔……麻生路郎選……（一四）
同舟近詠……諸家……（一七）
一路形見……高橋かほる選……（一八）
集易者……杉原天研子選……（一九）
各地柳壇……（一二）
川柳類題索引……（一四）
川協・柳界展望……（一八）　猶轉椅子……（一〇）
社關係の人々……（一六）

うたがりあ！んさ隊兵



漫筆 **ひ句の後銃** 路郎生

＝戰線の兵隊さんへ贈る＝

（一）首相

東條英機首相は何事にかけても臨機應變だし、神出鬼沒だし血もあるし、涙もあるし、威張らないし、すべてが簡素だし、誰が何んと云つても（誰も何とも云やしないが）我等のガン首として最大級の尊敬と最大級の親しみとをチャンポンにして感激してゐるんだと云ふことを先づお知らせする。今までの總理大臣や陸軍大臣と違うて、何ン時諸君の上空にあらはれて、御苦勞々々々てなことになるかも知れない。

水戸黄門と豐臣秀吉と眞田幸村と宮本武藏と猿飛佐助とを打つて一丸にしたやうな首相だからな。百人一首の作家の一人に迚も長い肩書の人がゐるが、我等のガン首はそれよりも遙に長い肩書だ。大東亞圏内で、イヤ世界中探しても東條さん位長い肩書の持主はゐないだらう。日本が伸びるたんびに東條さんの肩書がのびる。つまり東條さんの肩書は日本が伸びるバロメーターみたいなものである。あん

柳祖に告ぐ

麻生路郎

★川柳忌を二句の後に控えて、私達は次ぎのやうな悲しむべき出來事を柳祖に御報告申上げなければならないことを悲しむものであります。

★それは明治末葉に川柳が復興して以來仲よく提携して來た日本の柳界が最近、正義派と時局便乘派との二つに割れたと云ふことであります。

★正義派は聖戰下、その職域にあつて、川柳による心の餘裕をつくり、只管新日本文化昂揚の實を擧げ、同時に柳祖の偉業顯揚につとめてゐるのに反しまして、時局便乘派の人々は川柳の愛好を第二義とし、徒らに虚名を趁ひ、政治的暗躍によつて自己の立場をつくるに汲々とし、心あるものをして慨嘆せしめてゐるのであります。

その第一の表はれといたしましては歴史ある川柳人協會を無視し、俄づくりの日本川柳協會なるものを結成して時局便乘を劃策したのであります。しかしながら日川協役員の過去の悪業を知悉する近縣の川柳人は勿論、遠隔の地に於ても一つは協會加入を拒避するがため、一つは純正川柳の牙城を護らんがために、各自の協會を組織して眞正面から藝能奉公に邁進したのであります。

然るに、日川協の役員は自己の無能を察知せず、たまたま文藝報國會參加問題に絡らまつて、俳句部門の第四分科に投ずるの愚擧を敢行したのであります。川柳の名を汚すこと、これより大なるものはないと存じます。素文氏の川柳漫畫を低級なりとして排撃したりしてゐた口の未だ乾かないうちに、俳句の傘下に降つて、得々としてゐるに至つては、その人々の常識の存在すら疑はしいのであります。彼等日川協役員は、俳句の軍門に降つた屈辱を屈辱とせず、委員長の並々ならぬ努力を多とし、默視すると云ふのであります。そして俳句の人たちよりも非力なることを知つたと云ふのであります。

以上は耳を覆うて鈴を盗まんとするに類する辯解に過ぎないと云はれても辯解の餘地はありますまい。曾て、松岡さんが噴然として國際聯盟を一蹴した、あの精神があつてこそ、川柳も又文藝報國の誠を致すことが出來るのではありますまいか。一文藝報國會に參加するのに、何んの委員長の努力ぞと云ひたいのであります。參加、不參加は僅に一分間を要せざる問題であります。參加に難色があればサツサと引き揚げて來ればよいのであります。頬冠りをしたり、聲色を使つたりして參加する必要は更にないのであります。

私たちは他人名義の切符で乘車するにも等しい行動は採りたくないのであります。川柳人は文藝報國會に參加することが唯一の報國であると云ふやうな錯覺を起さないことであります。首相が說く職域奉公の眞精神を汲まず、無闇な蠢動は第五列と何等選ぶところのない結果を招來するのであります。正に國難に直面してゐる際に、文藝報國會に參加することを以て、川柳の文藝的地位の引上げを策する

うたがりあ！んさ隊兵

まり長いので今、暗記してゐないから、それは又の機會に讓らう。

（二）五厘刈

近ごろ、いろんな會合で、目立つて殖えたのが丸刈である。

—點呼？

—ウン。

—一寸見違えたぜ。

—どうだ。若くなつたらう。

—たしかに、五ッ六ッ。

到るところで、こんな會話にぶッつかる。

川柳人も日に日に丸刈が殖える。

川柳人Tが散髪屋へ行く。

—五分刈にしてんか。

—出來しまへん。

—どしてや？

—一寸云うたら、これ位おまッしやろ。そしたら五分云うたらこれ位おまんか。

と、散髪屋は指で長さをして見せる。

Tは自分の前額の禿げあがつてゐるのをツルリと撫でて見て

—ホンに、そやなア。

—五分刈〳〵云ひまつけど、アレは五厘刈だッせ。

—なるほど、五厘刈か……。けど、やつぱり五分刈云はんと、うつらんな。

—どうしてだす。

—五分刈頭で勇躍征途につくと云へばいかにも、日本の若者らしいが、五厘刈アタマで勇躍征途につくでは勇躍らしうないがな。

—なるほどな。そう聞くと、五厘刈はいきまへんなア。旦那も征きまんのか。

—征きたい思うてンねけど、お召しがなけりや、征かれへんがな。

—それもそうだんなア。旦那は歩兵だッか。

—騎兵や。

—上等兵だッか。

—少尉や。

—偉らうまんねな。

—ドヤ、見直したやろ。

—しかし、一寸お齢か……。

—オイ〳〵。それほどでもないやで。

と云ひながら、Tは又もや前額をツルリと撫でた。（以下次號）

兵隊と手紙

南方派遣　大森風來子

さていよ〳〵來るべき處へ、無事についたやうです。常夏の國ジャングルの大島、まるで映畫を見てゐるやうです。珊瑚の島々、白い砂濱、銀色の波、一本並びに海岸傳ひの椰子の樹々……星月夜そしてスコール。旋風機の鈍いモーターの音と虫の音と雨垂れの次第ににぶる音を聞きながら、青葉の中の二階の一室で、一杯三錢のコーヒを四五杯平げ久しぶりの便りに、どつとばかり今晩は大馬力をかけてゐます。三月三日

が如きは以つての外であります。そのやうに考へることすら間違つて居ります。他意ある參加こそ報國の精神に悖ると云ふものであります。

朝鮮の省二老、本誌編輯部員に一書を寄せて曰く、「吾等は一人となつても川柳の旗を守る者也。大奮闘を切望致し候」と。この精神こそ祖國日本を死守する一大精神なのであります。

この叫びは全國及び海外川柳人の聲を代表してゐるのであります。

殊に日川協の内部にすら、囂々たる非難が起りつつあることを思へば、まだ〳〵川柳滅びずの感を懷くものであります。日川協青森縣支部長小林不浪人氏は「みちのく」七月號の卷頭に、「安價な妥協は川柳のため百年の悔を殘すものであることを、僕たち川柳家は眞實考へ直さなければならないのではなからうか。川柳の一大危機を默過するに忍びず、川柳のために聲を大にする所以である。」と叫んで居ります。

日川協内部に於てすら既に具眼の士によつて、斯くの如く反對の烽火が擧つてゐるのであります。私たち日川協に關係のないものにとつては敢えて爭ひを挑むものではありませんが、事いやしくも川柳そのものの大問題である限り、日川協の一委員の無智に左右されるいわれはないのであります。

柳祖靈あらば來り援け、以て日川協幹部委員の反省を促し、光風霽月下に川柳の巨木を讃仰せしめられたいものであります。合掌。

文字の國の新聞から——

ZZ

編輯室を掃除してゐたら新聞大の紙が出て來た。それは石井白面人氏が本社の三月例會で、時局に關係のある著名人物及地名軍艦名などが支那の新聞にはどんな文字であらはされてゐるかといふ興味のある話をされた時の黑板代りの紙である。このまま反古にしてしまうのも惜しいやうな氣がするので發表することとした。

羅斯福大總統（ルーズヴェルト大統領）哈爾（ハル長官）諾克斯（ノックス）史汀生（スチムソン）馬格兒達（マグルーダー）格蘭第（グランヂ）林白上校（リンドバーグ大佐）邱吉爾（チャーチル）包巴母（ボパム）美英（米英）維克（ウエイク＝降參）佩得萊爾（ペトレル＝抵抗）倍迭蘭兒（ペトレル）伯來西定特哈里遜（プレジデントハリソン）偉斯脫維西尼亞（ウエストヴアジニア）阿里祖那（アリゾナ）奧克拉荷嗎（オクラホマ）愛太勃拉斯（エンターブライズ）普林士奧布威爾斯（プリンスオブウエイルス）里怕爾斯（レパルズ）密得威（ミッドウエイ）—普譯—關島（グアム島）威克（ウエイク島）中途島（ミッドウエイ島）—意譯—瓦胡（オアフ）火奴魯々（ホノルル）婆羅（ボルネオ）巴拉歐（ペラオ）達巴奧（ダハオ）墨素里尼意太利首相（ムツソリーニイタリー首相）德意志（ドイツチエ）希特拉（ヒットラー）李賓特羅夫（リツペントロツプ）戈林（ゲーリング）史太林（スターリン）莫洛特夫（モロトフ）

川柳塔

=路郎選=

歸郷して

裏に出ておかずが釣れるわが家なり
神様が護つてくれた子を圍み
力なく公衆電話を出る女
業廢めて忘れ居しものよみがへり

芦屋 大坂形水

働けるうれしさ番茶ばかり呑み
休養は裸で寢てるこの夏よ
ヘルメツト暑い思ひの交叉點

大阪 橋本綠雨

右の手をにゆーと伸して虎眠る
巡査來るまでは流れる土左衛門
車屋と明治の話して別れ
八月十五日候文で書いて見る
月見草地球は丸い物らしく

大阪 高橋かほる

遺言はないです短い毛を包み
新妻のけふはむやみに醜くたき
玉串や左の手には遺兒を抱き

大阪 西田艸樂

生ビールもう銀行屋の顏でなし
議論などサラリと捨てた生ビール
ワンピースお守り札が腰に見え
虫が鳴くのを男氣にしてず

大阪府高石町 戸田孤篷

墓參行

關西線

トランクの個性を知つてゐる驛手
どなつてる聲で先生みつけられ

孤野

輕鐵は森の所で右へそれ
平凡な華とも見えぬ蓮の村

尾張國萩原町

鵜飼

岐阜提灯女の舟はみつめられ

車中

禪坊主なめ〳〵住所書き終り

兵庫縣川西町 戸倉普天

日本に慣れて半島人の下駄
終電車喜劇悲劇を乘せて行く
アツパツパ暑く喪服の暑くなし
砂袋積んだまんまで草が生え
妙な顏に妙な髪してよく似合ひ
兩足を机にあげて聞く身分

尼崎 水谷鮎美

書齋も惰む上中下卷皆倒れ
雷のさなかに御飯がふいてくる
波に聞く詩情にぎんの月まるし
雀すゞめ雀は一茶とは知らず
立秋ににんげんの垢眼にみえる

芦屋 寺井鋭々

第二國民兵點呼を受く

執行官慈愛の瞳輝かせ　大阪　八竹正柳

無雜作な髪を秋風もて遊び

第二國民兵訓練參加

駈足の音戰線へ續くもの　京都　明石柳次

サングルへ遠雷があり心する

診察場吟

暑いからねえと患者を慰める

この暑さ白足袋はいて何處へ行く

父さんのほくろが大きいクレオン畫　山口縣小郡町　長野井蛙

脚絆卷く手つきも捷てる國の子等

捷てる國の餘裕浴衣に兵兒を卷き

振る旗もトンネルまでの山の家

休閑地名もない草に名を成させ

蠅取紙這ふ子へ置場かえてゆき

關門隧道開通を想ひて

地圖に見る海を寢ながら拔ける汽車　堺　村上角堂

釣竿を調べて見たが熱があり

國捷てり青葉に强い日の光る

軍縮の苦勞が今ぞ酬ひられ　大阪　福井哲

モンペ隊ほんものといふ型で消し

立話焦げる臭に吸ひ込まれ　ハイラル　宮岡白峯

汗ぼたりぼたり留守宅からも落ち

汗一つ內地の水となり給へ

軍用車煙の中に一つゐる

慰問團鹿兒島小原安來節

秋の虫歩哨の足も止めてゐる　松本　石曾根民郎

妻は夏病む

藥運ぶ汗に妻の眸寢て應ふ

胡瓜茄子その艶に融け癒ゆる日か　大阪　正本水客

蟹の穴おとなの意地をつのらせる

兵の家ヒマの葉しげる庭を持ち

乘越の手ごろな家を見付けてき

責任がどうのこうのと負續け　豐中　黑川紫香

親のない子供と知れる習字帳

室津港

泡ふいて蟹は宿屋の敷居逃げ

遲刻した帽子は隅へそっと置き

藤椅子の裸へ回覽板を見せ

朝顏のとこ迄妻に見送られ

まづ二階見せて貸家の値がきまり　大阪　丸尾潮花

逢へさうな豫感心齋橋で降り

海鷲に似てあざやかなダイビング

クロームの指輪へ夢を捨てず持ち

嫁して來て男ばかしの家に住み

貯金帳これは妹これは妻

爆音へ行水の子も伸びあがり　大阪　北川春巢

魚釣りの本も讀んでる七度二分

點數にして驚いた土用干　大阪　尾崎方正

劇勞へ目を拭くだけの手拭さ

あんな奴がゞ大きな仕事やつてのけ

器量よし扇を使ふ手も涼し

惜しい容姿剤檢臺に目をそむけ　廣島　濱田久米雄

遠淺へのつぼはのそり〳〵行く
お隣も百日咳の子が起し
名醫とは默りこくつて何か書き　大阪　中内翠芳

釦一つ外さず職場守り續け
水泳場繪日傘一つ目に映り
念入れて挨拶をして乘り後れ　下關　多田市多樓

厚化粧それで一幕だけの役
君君と書いた手紙の妻へ宛て
人を待つ自分の影がスパイめき　ボルネオ　大森風來子

二つ三つ椰子が轉げて雨が止み
好きなひとの便りは銃後ばかり書き
スコールが來た物干はほつておき
住所錄要らない便りばかり書き　ボルネオ一の高山　岡山　逸見灯竿

キナバルの傳說を讀む勝ちいくさ
ターザンも日本の威力知る日なり
軍事便とぎれたとこでバナナ食ひ
捕虜と語れば戀人の寫眞出す

休閑地一寸眼鏡を持つて來い
蜂の巢と知らず印度へ手を觸れし
英國も分家の金をあてにして
玄關へ出る時だけの浴衣です
扁桃腺此の一粒が越さないか

眞夜中を告げて靜かなオルゴール
サイゴンの唄が電波に乘つて來る　大阪　夷一笑

井戸がへに去年のラムネ上つて來　京城　鈴木石鹿

お悔みも女將は世辭の數のうち
成せば成るものと首相は範を垂れ　德壽宮美術館にて

彌陀如來、守衛の脊に在しまし
惡政は藝術などにかゝはらず　高麗李朝懷古

色だけは英にまかした印度地圖　大牟田　高田抱逸
妊んでの式へ姉婿だけ座り
借りてゐる伯父は俺にも樣をつけ

厚化粧不孝を佗びる樣に去に　下關　國弘半休
うたゝねの重さを入れる蚊帳の中
心身を鍛へる子等に起される　西宮　阿萬万的

土田麥僊遺作展を見る

燕子花妓等に今宵も雨が降る　燕子花

林泉舞妓圖

しみ〴〵と見れば舞妓にあるうれひ　明粧

固くなればなほいとほしい妓の瞳
凝視とは哀しきものぞ女の眼
吸殼にまで個性があるとはさみしいね　尼崎　小林文月

姪夫妻寶石を郵送し來る（三句）

飯要らぬ珍客二人訪ねて來
五パーセント笑ひかけたる若夫人
五分に刈る直前と思へぬすまし樣　朝鮮　小川恒明

朝鮮に榮轉などと追ひやられ

警察のやつばりこゝも不親切
大阪にも居たと妓の話好き
ネオンサイン點いてますよと母へ書き
元氣なら元氣と手紙書けと云ひ

昌慶苑にて

うまさうな奴と山猫睨らんでゐ

德壽宮（美術館）にて

千年の歴史を持つた陶枕

大阪　德永雅美

傷痍章足投げ出したまゝ坐り

西宮　谷口綠葉

バケツからきれいに切られた冷奴
砲煙もかくやと入道雲を見る
文部省推薦子供未だ讀めず

間閻點呼近し（二句）

丸刈へカンカン帽のすわりやう
歩腹前進赤子にコツを教へられ

大阪　武部香林坊

旅順博物館記念館にて

白米を喰べて日本は強かつた

水師營會見所懷古

軍刀と汗と握つたステツセル

滿蒙開拓青少年義勇團出發

岸壁へしばし名殘りの擧手の禮

大連航路

百萬圓の夢がキヤビンの風に搖れ

旅順の山野

こぼれてる遺骨を人に踏ませまい
雨降れば屋根が流れる家を建て
笑へるか豚も笑へぬ慕し向き
歸宅して厠の妻に聲を掛け
好いことがあるぞと易者はまねき寄せ

布施　上田翠光

戰線へ妻子は夢で迎へられ

義姉急逝

耐えかねた涙は藏の隅へ來る

大阪　井上湧三

百日咳を病む子へ

お醫者はんへおかしいけどと勸めに來
情炎の焰と燃えてカンナ咲き
堵列した玉蜀黍へ砂埃り
夾竹桃爛れた戀の色で咲き
錬成のけふぞいよ〳〵男なる
三人の母でピンクのワンピース
河豚だ〳〵とたぶらを子らが捕みに來

（註たぶら―膵臟部、腎臟）

蚊帳の子へ月やんわりと差し覗き
乳房こゝにありと素直にワンピース
夏痩せにバンドへ一つ孔がふえ

尼崎　長谷川三司

退院へ皆な玄關で禮を云ひ
交渉に二を三で割るコツもあり
ハイキング地藏の顏も撫て過ぎ

大阪　野元吐空

高架から見下すビルは市の賣舗
皆樣のホテル高架の下にあり
死場所も珊瑚眞珠と持てる國
漂流へ尺八を吹く兵の居て

堺　麻生アート

アルミ貨の悲しきさだめ知るやきみ
夏草の毒々しさが眼にあまり
遊んでなぞゐません云ふバツヂです
二乙でもお召しはあるとなだめられ

川柳の近畿 大和篇（七）

麻生路郎

（三）大神神社

★大神神社（三輪神社）は省線三輪驛へ下車するとすぐ東方の三輪山の麓にある官幣大社である。祭神は大物主神、（大國主命）創建は天孫降臨以前で日本最古の神社である。しかし、その後、祭祀が中絶したとみえて崇神天皇の御代に御再興になり、大物主神の神託によつて神裔大田田根子命を神主として祭祀を司らしめ給うたことが紀に記されてゐる。これが現在の社地の起源である。三輪山は海拔四六七米、山麓の周圍が十六キロある。古松老杉が全山を蔽ひ、圓錐形をした秀麗な山容で、しかも侵し難い威嚴にみちた山である。この神社の特殊形式であることは三輪山そのものを御神體としてゐることで拜殿はあるが本殿はない。神殿に代るものとして、有名な三輪鳥居の内部に禁足地帶を設けて入山を禁じてゐるに過ぎない。

★三輪鳥居といふのは普通の鳥居三つを組合せ特殊な形式としたもので、柱間に扉をはめ、錠を裝置してある。扉を閉してあるのは一般の神社の神殿の扉の場合と同じ意味を有するものであらうと云はれてゐる。

★今の拜殿（國寶）は寛文四年に德川四代將軍家綱の再建したものである。建物は九間四面・單層・切妻造・檜皮葺で正面に三間一面の破風造の大向拜をつけてゐる。

★古川柳に、

いと長き物語なり三輪の神
三輪の神あげくのはては無心なり
杉の葉をよけ〳〵糸をたぐりゆき
三輪の神どぶをまたぐとだまをやり

などがある。何れも謠曲「三輪」や緒環を詠んだ句である。

★一の鳥居から拜殿まで約七町ある。鳥居内に神道大神教會本部があるが神社とは無關係である。

★若宮（攝社大直禰子神社）は二の鳥居の北一町餘、鳥居内には夫婦石に二もとの杉の址、謠曲「三輪」の玄賓僧都の衣懸杉などがある。

★大神神社を詠んだ今人の句では

三輪山と菊の御紋と蓋股 孤蓬
大物主妹がりゆけば鳴く蛙 葭乃
明神の獨白橋の上へ來て 同
永遠の秘密鳥居で遮ぎられ 同
鳥居から先は神代と知られ 路郎
たり 同
山の神秘ただ悠久と申しとき 同
神樣の戀もはかなきものの 同
うち 同
三輪の茶屋こころさびしく 同
酒を呼び 同
三輪の茶屋故鄕を思ひ死を 同
おもひ 同

（四）三輪の茶屋

★三輪の茶屋（竹田屋喜七）は一の鳥居のすぐ西北にある。今は門口に、辯護士何のなにがし事務所の看板がブラ下つてゐて訪れるものに先づ幻滅の悲哀を感じさせ、「戀飛脚大和往來」で名高い梅川忠兵衛の遺蹟とも思へない。庭内は雜草が生ひ繁つて荒れるにまかせてある。外部から見える階段を二階へあがると、部屋が鍵の手に四間ある。梅川と忠兵衛が延寶元年の秋、この部屋で遊んだのだといふ。

★古川柳に、

忠兵衛は二兩ならしに使ひすて

といふ句がある。これは戀飛脚よりも、大津繪の文句で名高い「二十日あまりに四十兩つかひ果して二分殘る」から割り出したもの。

★三輪の茶屋を詠んだ今人の句。

梅川へお山の戀を聞かすなり 孤蓬
夕靄に假寢二丁三輪へつき 葭乃
新ノ口はあそこと宿の窓を明け 路郎
二分殘るまでを二人のさざめごと 同
素麺に箸もつけない二人にて 同

（五）緒環塚

★緒環塚といふのは三輪山祭神にからまる傳說が生んだ塚であるが、その所在は一の鳥居の北方であるには違ひないが、判然としない。

★纒向川の橋を北へ渡つて半丁ほどのところ、池に沿うたみちばたに一基の塚の如きものが木柵で圍うてあるのを發見したので、雜草をむしり埋れた石を掘つて、石面を讀むと環緒塚とある。緒環塚とすれば文字が逆轉してゐる。その文字の左に少しはなれて天照大神——七町とある。これは倭笠縫邑を指したものでこの塚の元あつたところからの距離を示したものらしい。環緒塚の文字は右端に大きく刻まれてはあるが、この塚が緒環塚そのものであるか、どうかは疑はしい。何れにしても、笠縫邑への距離から推測すると、も少し東にあつたものに違ひない。織田村の役場を訪ねて見たが、教へてくれたのは矢張この塚であつた。そしてこの塚は元、池の中ほ

どにあつたものだといふことを談してくれたので豫測通り少しく東にあつたことだけは判つた。もと田圃の中にあつたといふ村人もゐたが、確證をつかむことが出來なかつた。

★河内の陶津耳の女、活玉依姫は非常な美女であつたが毎夜美しい若者が姫を訪れた。そのうちに姫が姙娠したので兩親が不思議に思ひ、譯を聞いて見ると、美しい男が毎夜來て一緒に住んだが男の名は知らぬとのことであつた。

そこで夫の名を知らうと思へば赤い土を床の前に散らし閉蘇の紡麻を針につけ、夫の襟を刺して見よと教へられたので、夜になつて男が來ると教へられた通り針を刺して置いた。翌朝になつて見ると、針につけて置いた絲は戸の鈎穴から出て、殘つたところの麻絲はただ三勾ばかりであつた。で姫は其の絲の先をたづねて段々行つて見ると、美和山の神社に留つたので、さては神の御子であつたのかといふことが判つた。そこで絲が三勾殘つたから其地を三輪と名づけたのだと云はれてゐるが、三輪の名の起りは他にもあるからどうとも云へない。

しかし活玉依姫がその殘りの三勾の絲を埋めたのが、緒環塚と呼ばれてゐるのである。それが後世、近松半二の「妹背山婦女庭訓」の三輪の杉酒屋の娘「おみわ」の話となり更に、をだまきに因みを持つ、三輪素麺として土地の名物となつたなど面白いと思ふ。

★緒環塚を詠む。

正體を知るかなしみの糸となり　蔑乃

箸環塚あれでせうとはつれなかり　路郎

箸環塚そのおだまきの糸も切れ　同

(六) 箸の墓

★箸の墓は織田村大字箸中にある。大市の墓・箸の塚・箸の山などの異名があるが孝靈天皇の皇女、倭迹迹日百襲姫命の御墓である。兆域の周圍は約四六八間で、巨大な前方後圓墳である。この墓の築造は晝は人が作り、夜は神が作り、所用の石材を二上山の麓の大坂から、人々相踵ぎ手越（今日のリレー式）で運んだのだと云はれてゐる。

三輪の茶屋から三輪山を望む　孤蓬畫

百襲姫の御事績は國史に記載されてゐないが、御墓築造の記事から偉大な存在であつたことは推測に難くない。

★この墓にからんだ傳說がある。往古、倭迹迹日百襲姫命が大物主神の妃とならせられたが、男神は晝は少しも見えないで、ただ夜ばかりお見えになる。姫は不思議に思はれ、ある時「あなたは夜になつてからお出で遊ばすので、とくとお顏を拜する折がございません。どうか、あすの朝まで留つて、その美しいお顏を拜ませて下さい」と心からお賴みになつた。すると大物主神は「では明朝、そなたの櫛笥の中に這入つて居やう。しかし、わしの姿を見ても決して驚いてはならぬぞ」との言葉に、姫命は何事だらうと內々怪しく思つてゐられた。そして翌朝になつていそいで櫛笥の蓋を取つて御覽になると、一匹の美しい小蛇の、しかも紐ほどの長さなのが蟠つて居るので、「キヤツ」と一聲叫んで立ちあがられると、蛇は忽ち人の姿となり、その妻である姫命に向つて「そなたは私に、恥を忍んで呉れなかつたから私もそなたに恥を見せるであらう」とすぐに大空を踐んで、御諸山（三輪山）へとお登りになつたので、姫命はこれを見て非常に悔しがり、箸を陰部に突き立てゝ其のまゝお薨れになつたので、その遺骸を大市に葬り、時の人が、これを箸の墓と呼んだのだと云うのである。

★箸の墓を詠んだ今人の句

視神經遂に蛇體を見てしまひ　孤蓬

その櫛笥開けずは夢も續きしを　蔑乃

樫の葉も秘話を囁く箸の墓　同

箸の墓男ごころのつれなさに　路郎

大物主ちといたづらがすぎたまひ　同

百襲姫櫛笥とともに葬られ　同

箸の墓さもありなんと女いひ　同

箸の墓三諸の山も曇るなり　同

三輪山も照覽あれと箸の墓　同

……

▼前號の（二〇）聖林寺、（二一）安倍文珠、（二二）若槻神社の番號落植につき追補。

あべこべの問題

澤田四郎作

某日部落の家長の家の披露の宴に招かれてゆく。門口にまであふれた今日の招かれた人々は、聲高く何事かを話し合つてゐるが、はて不思議や「日滿會話五十日」で知つてゐる筈の滿語が少しも耳に入らぬ。はてなと首を振つてゐるうちに、日本の軍隊が防諜上部隊名を片假名の代りに平假名を使ふのを眞似て、滿語の平假名文でやつてゐるんぢやないかと考へついたが、滿語の平假名文とは一向に聞いた事がない。所在なさゝに一人〳〵の顏を眺めてみる。どこかで——といつても日本あたりで見かけた樣な顏もある。筋向ひの角刈りは昔瀧之川のあたりに住んでゐた頃の大工の頭梁さんにそつくりだお隣のおつむのテカ〳〵とはげ上つた老人はと段々見渡してゆくと、はて確かに見た事がある人だがと、しきりに考へてみると、それも道理、東洋史の挿し繪の關羽そつくり。お隣の生白い瓢箪顏はと見ると、八年も昔藥價をふみ倒して行方をくらました男の事が思ひ出されてくる。口から泡をとばしてしやべつてゐる男の横顏が、なんといやな蔣介石、思ふだけでも胸糞が悪くなつてペツト唾を吐く。有難い事には唾吐く事は公許の國である。いよ〳〵席につくとなると人々は雨上りの泥路を歩いて來た長靴を履いたまゝのこ〳〵と御座敷に上り込んでしまつた。尤もお座敷といつてもアンペラ敷きではあるが、布團を敷いて人々の寢るところ、自分はこれをみてびつくりしてしまつた。日本なら、お座敷へ履物をはいて上るのは、股旅小說の切り込み以外にはない筈だからである。

髮の毛、目の色、容貌までがよく似たこの二つの民族——それとても人種學上からみて全く同じツングースである——の日常の生活のうちに現れたこんな相違が興味深く考へさせられてくる。

こんな招待にはよく慣れてゐる1憲兵伍長から教へられて、机の下でごそ〳〵と包んだ祝儀の額面も、日本では奇數だが滿人は偶數を好むからとて注意された事なども思ひ出されてくる。宿舍のあたりで仕事をしてゐる木匠なども見てゐると日本製のカンナを使用してゐるが、板をけづるのに日本の樣に手元にひかずに逆である。いつみても向ふへ突き出すよりも手元に引いた方がらくだと思ひながら見てゐる。

內地からやつて來て、ほや〳〵の人が、故郷の友人の結婚のお祝ひに、何か安價くて見ばえのする品物を求めんと街の商店を歩いてみたが一向見當らず、へと〳〵になつて街の四辻にたゝずんでみると、目の前の看板に書いてある壽器店の文字を見て、これ〳〵と喜んで飛び込んでみると、そこは葬式具の店であつたといふ。尤もこの話は私が勝手に想像して作り上げた笑ひ話であるのだが、日本では目出度いお嫁のくばり饅頭の風呂敷の模樣までがこの壽の模樣を描いてゐるが、支那・滿洲では壽器店といへば棺其他葬式に用ゆる衣帽類を作つて賣る店の事で、壽器といへば棺のこと、壽衣といへば葬式用の薄黃色の麻衣、壽帽といへば葬式の白色の烏帽子といふのである。

これなども日本と全く逆である。尤もこれは「死」に對する觀念の相違によるものである。滿洲では相當の生活をしてゐる家では自分の身分に應じた壽器——つまり棺を家に飾つてゐる。挽き板を簡單に打ちつけたのから、漆塗りの美事な模樣の描いたものなどいろ〳〵ある樣である。木材の赤身は容易に朽敗しないといふところから赤身の材は特に貴重がられて、こゝの家長の家でもこれを圓心壽器と稱して、その家の富を誇つてゐるのをみるが圓心は材木の赤身の部分のことである。

昔日露の風雲急なりし頃、滿蒙の野を驅つて活躍したわが殉國の士が、洗面する所をみられてすぐ日探と露見されて、荒野の露と消えた話は、われ等が少年の頃聞いた話であるが、自分はかうした兩民族の日常生活に現はれたあべこべを興味を以てみる。昔の歷史を繙いてみてもわかる通り、この兩民族の間には長い〳〵つながりがあつて、彼等の文化が日本の豐かなる花園に培はれて美しい花と實をつけた事があつたのである。學者の說によると、この兩者は

もと同一であつたとさへいはれてゐる。それが大陸と東海の島に住み、互ひに行き來があつても、今日に至つて、なほこうしたあべこべを多く殘してゐる。

つまり二本の平行した絲がどこでくひちがつてかあべこべになつてしまつてゐるのである。そのもつれを解きほぐしてみるのが私の念願である

この頃私の興味をもつてゐることは、日本の民俗のうちにみるあべこべの事である。ある地方では人が病氣になると、どんなに爪がのびても切つてはいけぬといひ、ある地方では人が病氣になると病中で急いで切つてしまふことの類である。全く同じ祖先から出て、同じものを食して同じ生活をしてゐるのに。これもどこかで絲がもつれたために、あべこべの現象が現れてゐるのである。

今日着いた民間傳承七月號をみると柳田國男先生の「買物言葉」といふ文が見えてゐる。各地の子供が買ひものをするときの幼な言葉をひろく採集せられて、「不見識のやうだが、昔の社會では賣つてくれる方が大低は御大家であつたからである。さうして今日は統制經濟に入つて他の大都會でも再び又顧客の方が、毎度ありがたうの語を連發しなければならぬ形勢に立ちかへらんとして居るのだから、この感覺は今ならばまだ理解し得る」と述べられてゐることは、この絲のもつれをとく一つのヒントとなるのであるが、日常の生活のとりわけ心意現象に鋭いメスを入れられる川柳人たちにも、このあべこべの問題を捧げたい。

（一七・七・二六）筆者は醫學博士民俗學研究家（目下出征中）

氣違ひ踊り

夷一笑

阿波の鳴門で生れ其處で少年の頃を過した私に取つて、阿波のぼん踊は懷かしい思ひ出の一つである。一體氣ちがひ踊なる名稱はどこから起つたのか知らぬが、土地の人はあまり用ひない。大方他國の人が此の踊を見て、まるで氣ちがひだと云ふところから始まつたものと思ふ。しかし私は此の踊りを見て居て、決して氣ちがひじみてゐるとは思へぬ。

けれども〃踊る阿呆に見る阿呆〃と云ふ文句があり、又〃踊る氣ちがひ見る阿呆と云ふ文句もある。これは土地の人もよく云ふ言葉である阿波のぼん踊りは他國のそれとまるつきり變つてゐる。およそどこの國でもぼん踊りと云へば一ツの共通點が有る樣に思ふ。

たいていどこの國でも櫓を組んで其の上で太鼓に合はせて音頭をとり踊り子は櫓を中心に圓形になつて踊る。又そのリズムも、ゆつくりとして落着いてゐる。これは一晩中踊つても大したつかれも感じないであらうが、何しろ阿波の踊りと來たら囃子連中も踊り子も一緒になつて村から村へ、町から町へ踊つて行くのである。その上リズムが急テンポであるため非常に過激なものですぐつかれてしまふ。

だから一丁ほどゆけばやすみ、二丁ほどゆけばやすみ、踊りながら、又やすみながら、それ〴〵目的地へ集つてゆくのである。

昨年東寶映畫の〃阿波の踊り子〃を見たが、踊りに重きを置いて居るため終始踊の場面が多かつた。又最後の場面で何百人と云ふ男女のむれが一度に踊つてゐた。大壯觀である。けれども、現代ではあんなに澤山の人が一度に踊ることは先づ無いであらう。

大てい二十人ほどが一組になつてゐる。又、隣組などで作つたものは十人たらずのものも有る。もつとも色町あたりへゆけば、今でも三十人四十人ぐらひの大組もある。年增の姐さん級は、やはり三味線、太鼓、笛、鐘などの鳴物の方である。太鼓は男の人が多い樣に思ふ。若手連は何と云つても踊り子である。踊りの形をこゝに詳しく說明することは困難であるが、氣違ひ踊りと云つてもたゞ無茶苦茶に踊つたらよいと云ふ譯にはゆかぬ。

私の子供の頃こんなことが有つた。或る夏、田舍まわりの芝居が私の村へやつて來て、毎晩面白くもない芝居を見せてゐた。ある晩、幕合に目くらの浪曲師がどうして覺えたのか知らぬが、この國のぼん踊りを知つてゐるから踊つて見せると云ふ。上手に踊れましたら拍手御喝采を、と云ふので見てゐたところ、件の盲目の先生舞臺の中程へあらはれて、なんともたとへ樣の無い踊りをはじめた。たゞ手をふり足をばたつかせるのみで、むしろ滑稽味も感じられず苦笑を禁じ得ぬものであつた。客席からはやめいやめい、しようむないことをするなとどなられて浪曲師は頭をかいてへつこんだ。

これなどは、自分は全然見たことはないのであるがどうせ氣ちがひ踊と云ふから、まあこんな風に踊ればよいのであらうと自分の想像でやつたものであらうが、そんなものではない。

映畫〃阿波の踊り子〃では女優の高峰秀子がその形にはまつてゐた。又、俳優では長谷川一夫が踊りこなしてゐた。他の男女優も土地の人々にまけない程踊れるのが有つた。が中に二三かたくるしく踊つてゐたのも有つた。又あの映畫の中には土地のエキストラが大多數に出て踊つてゐたので、踊りの場面はそれらによつてすくはれてゐた。

見たところ大變むつかしそうであるが、ちよつとした形をつかめばあとは自由に踊つても見て見られぬことはない。

毎年この踊りを觀に京阪神からおしかけて行く人々のあることは、昔も今もかはりはない。私はあんまり大勢で踊つてゐるより、かへつて十四五人か、せい〳〵二十人ほどの人が踊つて行くのを見る方が好感が持てる。

服裝は身がるな長襦袢や揃ひの浴衣が一番多い。又、女はたいてい鳥追笠で、男ははかまをしてゐる。知人に顏を見られまひとしてうかれ者達が顏をかくす習慣は、いづれの國もおなじらしい。この踊りも支那事變から年々すたれて行つたが、英靈を慰めるためと、一つは銃後の士氣を鼓舞するため昨年の夏から又々復活したそうで、誠に嬉しく感じてゐる。

最後に、私はこの阿波の氣違ひ踊りなるものは生れてから今日迄一度も踊つたことはないが、踊れる自信だけはある。

科學する心に遠き盆踊り

紅多邑

新會員を募る

松坂倶樂部　川柳講座

▼新體制下の常識として川柳を知りたい人▼趣味として川柳を創作したい人▼從來作つてはゐるが、よい指導者がないので一向進歩しないと思はれる人々は▼松坂屋（日本橋筋三）の七階にある松坂倶樂部の麻生路郎川柳講座へ入會されたい。講座は月二回、第一、第三日曜日午後一時から開講（作句・添削批評講義等）會費一ヶ月一圓。入會希望者は七階の倶樂部受付へ申込まれたい。

（川柳講座幹事）

武玉川研究（一二三）

梅本塵山
森東魚
蛭子省二

五編（四）

（52）

二代めに終白槇の龍に成

塵山＝白槇は栢槇と書いて、びやくしんと音讀すべきで、多くは庭園の觀賞用樹として植ゑられるが、初代の人が庭園に植ゑて措いた栢槇が二代目の時に到つて生長し、龍の昇天するが如き樹勢になつたと云ふのである。

省二＝伊吹柏槇とも稱し、盆栽などをシンパクとも云ふ。タメがきくので、生花用ともなる。私の住む全羅南道の濟州島（海人で有名な）には、盆養に適するもの多く、拙家にあるのも、恰も龍の如く這つて居る。これが藥用にもなる。

東魚＝塵山翁の御教示を謝す。成る程句意も明かになつた。「和漢三才圖會」に、栝（びやくしん）圓柏、俗云柏杉、その一種跋柏杉―其木葉似栝而如蔓跋行横延數丈挿枝亦生、植之庭砌撓步龍虎船車之形とあるがこれであらう。

（53）

傾城の寢覺のよいも哀也

省二＝私に中七の場合がはつきりとせぬ。前句が欲しい。（一）客があつて、爲に寢覺めよき場合。それも思へば哀れな境遇だと云ふのか。（二）客がなくて、ぐつすり眠り、爲に寢覺めよき場合。然しそれも、なりはいの上からは哀れであると云ふのか。いづれにしても『傾城も哀れにみれば哀れなり』（武・八）である。

東魚＝寢覺めのよいやうなら、罪もつくらぬので、平凡なものだと云ふのではないか。

塵山＝少し快活の氣象で、はしたない故に、客の多く附かぬ女ではない歟と思ふ。

（45）

ほつと言ふ息も握て竹箒

省二＝寒い朝だ。ほつと吐く息を掌に握つて竹箒を取り掃きにかゝる

東魚＝「息も握つて」はきわどい技巧。かゝる點のみを目當にしてゐると、所謂月並に墮するのである。

塵山＝如何にも技巧に過ぎて、佳句とは評されぬ。

（55）

螢とらせて旅のおもひ出

省二＝此句も二樣に解し得られるかに思ふ。曾ての旅に―それが螢の名所であつたなら一層よろし―螢を樂しむことがあつた。今飛んできた螢をとらせ、あの折りの旅を追回する。或は今現に旅行中で、飛んできた螢を捕り、旅の感じに沁み〳〵とふける。

東魚＝旅にあつて螢をとらせた―それが、良き旅の思出だと云ふ方かと思ふ。

塵山＝往事（旅）を追想するので現に旅をして居る身ではなからう。

（56）

口寄にとつちともなき向加減

東魚＝巫女の口寄をする場合。仄かに可笑味がある。

塵山＝此場合には、巫女と相對して居るのであらうが、どつちともなきと云ふのは、能く聞き取れない。

省二＝「どつちともなき」は眞正面に向きあつてゐない意かと思ふ。一寸斜になつて座つて居る方が、口寄などの折りは、どこか意味がありさうな態度に感じられはせぬか。

（57）

靜な見世に突捨の錢

東魚＝客が物を買つて去つたあとに、錢を突きならべて置いて行つたまゝに、取り仕舞ひもせずにある。閑靜な田舍や市の場末などの趣である。

塵山＝前に物を賣つた錢を取收めずに、其儘店頭に措いて有るのを、夜見世などでも、屢々見受る。

省二＝田舍の店には、常に見受ける光景で、いかにも、もの靜かさだ。（突錢の巧みに列むで居るのは、一箇の感じをそゝられもする。『錢突く程に君も旅なれ』（武・十一）の句も生れる所以）。

（58）

昔か出れハしら〳〵と寐ス

東魚＝昔の境遇に話が及べば、色々な追憶のために寢られぬ。「しら〳〵」は十分意味が分らぬが、「まざ〳〵」と云ふ程の心持ちかと思ふ尙、夜の明ける趣に云ひかけてあるともみえる。

塵山＝「しら〳〵」は、天明の意かとも聞かれるが、恐らくは前解の如くであらう。

省二＝神經が昂奮しきつて眠られぬ。

（59）

あくひした子を抱上て行

省二＝ぐず〳〵して居ると、小便をしかけられる。

東魚＝親になると、直ぐ經驗する事だ。思ひ出して可笑しい。

塵山＝陽に小便を云はぬ點がよい

(60) **寒い茶椀ハ兩手にて持**

省二＝寒い日には、茶碗を兩手に頂いてもつ。これで寒さの感じが出る。

東魚＝聊か初心めいた句だ。

塵山＝此の茶椀は「茶碗」と書かねばならぬ。

(61) **閼しい日ハ病人も跨かれる**

省二＝邪魔になる。私など經驗なしとせず。時には躓かれたりする呵々。

東魚＝裾の方位は、確に跨がれるだらう。

塵山＝閼の字は、「いそがしい」と訓むのである。

(62) **光陰はやく親指へ來る**

東魚＝光陰の早さ。先づ親指を折り數へる。朔日ともう成る事だと云ふのであらう。

塵山＝賛成。

省二＝何んでもない句ではあるが「はやく」「親指」とした處は、十四字詩らしい。

(63) **妾ハ知て咄す鳥邊野**

東魚＝妾は鳥邊野などの樣子を知つてゐるが、殿樣や奥方は鳥邊野などへは行かぬから―この句があるのではないか。

塵山＝此の鳥邊野は有名なる京都の土地であるが、その鳥邊野でなく、他所の火葬場と解釋しても宜いと思ふ。

省二＝鳥邊野を詠込むだ句は、あとからも出るが、お說通り墓場と解すれば足る。たゞ鳥邊野とあつて、その背景から多くの聯想をもち、感じが深くなる。（「都名所圖會」に鳥邊野、或は山ともいふ。北は清水坂、南は小松谷を限る。むかしより諸宗の墓所なり。）

(46) **おとなしい人程廻る女坂**

省二＝氣だての、おとなしい人に限つて、登るに樂くな女坂へ廻る。

東魚＝樂な女坂へ廻るのは、一寸意久地がないやうだが、おとなしい人は安全第一で行く。「程」の意味合ひが、少しはつきりしない樣に思ふ。

塵山＝無氣力の男子であつて、昭和の時代に於ては、全く不向の人間である。

省二＝「聟になる良は靜な女坂」（武・十三）

(65) **紙屑ハ思ふに足りぬ投所**

省二＝思ひ滿たぬ、遣る瀨ない氣分で、紙屑を投げすてる。―此紙屑に意味があるか否やは、前句に因る「戀の礫にかるい紙屑」（武・十八）などは、十分思ふに足りる方である

東魚＝腹立しく投げ付けたものの紙屑では投げこたえがせぬ場合。自然の可笑味がある。

塵山＝女子の所爲で、何か意中に不滿が有るのだ。

(66) **若後家の淋しい道を知て居**

省二＝若後家の殊勝にも、淋しい道―佛參への―を心得て居る。

東魚＝墓參に行く淋しい道、人生の淋しい路と、兩方へ云ひかけてあるものかと思ふ。

塵山＝寺院とか墓地とか、孰れにしても淋しい道に相違ない。

(67) **戸まとひの味な所にかしこまり**

東魚＝思ふ相手の部屋へ忍ぶ處を見つけられて、寢ぼけて戸惑ひした振りをする。

塵山＝戸惑といふのは口實で、娘か下女の部屋に惑つたのである。

省二＝此句に於て「味な」は、一語十分に盡してある。古句には、この「味な」をよく用ひはするが。

(68) **むかしの袖に包む重箱**

東魚＝自ら重箱を提げ、物など買ひに出る零落した姿。着古した昔の衣裳の、流石に良い品である事も、一層の哀れさを增す。

塵山＝重箱の蓋に橋の紋章が附いてゐると、一層詩的になるのであるが。

省二＝「昔の袖」―うまく略して言ひ現はしたものだ。

(69) **高札に立寄人の反り返り**

東魚＝仰いで高札をよむ趣。何事ならんと、只仰ぎみてゐる連中もあらう。

塵山＝見事な筆蹟であるが、偖一字も讀めぬといふ人ばかり、額に手を當てゝ居る。

省二＝「反返り」で、興味を覺え眺め、讀まんとする樣が判る。これが日本橋のだと、「高札は目でみるそばで耳でみる」、その上反返つて。

釋評 古川柳の味

殘部少數あります。希望の方は五錢切手二枚送られたし（社内・アート宛）

近作樽柳

選路郎

歌舞伎座を見上げただけの公休日　大阪　橋本美奈子
ジイワリと妬くのもいゝもと夕涼み　同
爭つた口で讃美歌唄う妻　同
ナス・トマト・キウリへ雨を待つてゐる　同
淡々と書いて淋しい封をする　同
物干の風へ夫を呼んでくる　同
悉びた字で寓とかゝげた一軒家　同
一萬圓そんな夢なら見ぬがまし　大阪　丸尾夏子
切り花の樣に女のものたらず　同
膝付へ米や茄子をさげて來る　同
飛行機の影がもつれた草の上　同
夕立へ女みじめなものを履き　同
午後五時の月給取はにげるよう　西宮　谷口寒草
盆栽の趣味はためてるように見え　同
人を戀ふ日記もはたち代のこと　同
自叙傳の學習院の頃など　同
戀人にたよりも書けぬほどに病み　同

軍服を着ればれつきとした伍長　布施　原田麒親
ものおもひ濱風かろき中に立つ　同
打ち開ける心算で來れば休んでる　同
女の子ケーキの有るを見逃がさず　同
笑はれて近視淋しさ覺えたり　大阪　新川博也
初戀の女、看護婦志願した　同
歩を合し夏の夕陽を行く女　同
早仕舞事務所涼しい風になり　同
作法など温突にない戸を開ける　朝鮮　村野東狂子
草いきれ原人の事チト偲び　同
生存の限度へ座る唐玉蜀飯（カシヒ）　同
打水のしてあるとこが内地人　同
畑作つて知る人間の不正直　朝鮮　高原惡源太
廢物利用子供の智慧も加へられ　同
旅行する仕度の一つ時計まく　同
濠州かハワイかなどと輕く云ひ　同
御參考までにと人事申し繼ぎ　朝鮮　德永林業子

川柳類題索引 (4)

川柳雜誌自一號至二一五號

▼題の配列はすべてABC順、題の下の日本數字は「川柳雜誌」の號數で、算用數字は其の號にある題の頁數、例へば、汗五四(53)とあるは第五十四號(第五卷七月號)第五十三ページに汗の句があることを示すのである。

(一) 人情、風俗、人事、身體、病氣 (4)

Kの續き

駈引 一三(50) 一七(15) 一九(22)
蔭口 一三(54) 一八(18) 二〇(22)
禁煙 一七(3)
肩 一八(18) 二〇(31)
顏色 一八(19)
氣兼ね 一八(18) 二〇(21)
氣まぐれ 一八(23)
祈願 一八(20) 二〇(34)
姑娘 一八(20) 一八(15) 一八(18) 二一(34)
幸福 一八(21) 一八(18)
書初め 一八(19) 一八(20)
更生 一八(18)
混雜 一八(19)
記憶 一八(19)
吉報 一八(16) 一九(23)
癖 一八(16) 二五(33)
氣迷ひ 一八(17)
氣負け 一八(15)
きぬずれ 一八(15)
決心 一八(15) 一九(21)

辭令見てあはれ自分の價値を知る　同
空地利用三毛作の種を買ひ　同
手紙迄どもつて書くかと子に聞かれ　同
借電話翼賛壯年團幹事　大阪　内田　拠夫
よく見たら振替貯金の番號サ　同
ガンジーの蚊脛英國踏みにじる　同
神童のどゞのつまりは古本屋　同
回顧北支戰線
筋道は決つてゐても慰問文　朝鮮　加川　泉泡
回顧山西征破
驟馬の背に花さしてやる歸り道　同
うき上る臨冷城は春がすみ　同
草原へ愛馬ろかれて食ひもせず　同
聞喜城死守
岩鹽とアカザの草を今日も食ひ　同
新體制看板娘など要らず　大阪　八田　鐘生
成行きに任かす餘裕はもつて居り　同
いろ〳〵に疑て三等車の夜が明ける　同
勸誘員感心をすることに慣れ　同
靴下が悲鳴を上げてゐる太さ　大阪　新谷　柳風
分相應番茶の方がいゝのなり　同
なれのはての乞食藝者めぐんでゐ　同
夏祭風鈴賣も景のうち　同
傷兵を見て不平など未塵なし　東京　山田　宙望
空征く子便り無きまゝ神となり　同
老眼鏡戰ふ國に老ふを恥じ　同
臺所さても女の損を知り　同
モンペ隊出動覺悟の膳に向き　名古屋　森　流石

時事うとくふけを落した新聞紙　同
無醫村へ來て醫學生河鹿きく　同
帆走の男心の涼しさよ　同
蚊帳をつるにも暦のいつた母　滿洲　いたば・はるを
靜脈の青さよ妻よ早や四十　同
白衣着て霧の滿洲の朝を立つ　同
母の死に朝顏がチトはでに咲き　同
駈足へ青空ばかりつづくみち　松江　本庄　稔民
鉛筆の母の手紙は無駄書かず　同
母の旅檢温器まで入れてでる　同
亡父十三回忌を迎へて
逝きし父の癖を子に知る母となり　大阪　山本　葉光
墓石競ふ佛は何んにも知らんのに　同
身に燃えるものあり夜半の作句帳　同
起ち上る日本お吉も嬉しかろ　大阪　大鶴　喜由
風颯々殘り少ない毛を亂し　同
脫ぎしぶる娘に醫者は次を呼び　同
鮮人もところ〴〵は唄ふなり　朝鮮　上田丸太樺
内地名の人夫お早う丈は云へ　同
挨拶に戰況ニュースまぜて言ひ　同
故郷の古びた驛の掛時計　大阪　松岡　照二
干草の門外一ぱいの香ひする　同
組長の低くさへ丸い隣組　同
六十の母にも着せるワンピース　奈良縣　森田カズエ
お手製の洋服少し大き過ぎ　同
戰時下の娘としての茶を習ひ　同
三角の隣は菱の空閑地　大阪　有馬　千斗

隱し藝一八六(18)
廻診一八六(20)
食ひ過ぎ一八七(15)
健康一八七(17)一九九(20)
二〇三(17)二一(31)
訓示一八七(17)
沽券一八八(19)
影法師一八九(17)
氣持一九〇(21)
口一九〇(22)
怪我一九〇(22)
勘違ひ一九一(17)一九三(11)
一九三(16)
一九二(23)一九九(23)
歸還兵
君と僕一九二(23)
紅一點一九二(25)二〇三(17)
駈足一九三(18)
口實一九四(16)
共鳴一九四(16)
買溜め一九四(16)一九八(18)
片肌一九五(17)
口髭一九六(16)
假病一九六(17)
兄弟一九六(17)
感激一九六(16)
還暦一九七(22)
氣焰一九七(22)
子供一九八(22)
喰違ひ一九八(21)
片腕一九八(21)
顏馴染一九八(21)
片言一九九(21)二〇一(21)
顏役一九九(21)
車座一九九(21)
乞食一九九(21)
返り咲き二〇一(22)
海軍二〇三(18)
肩書二〇三(17)

屋上の稲荷を拜む博士なり　同　新谷一舉
敏感な目高を田螺おかしがり　同　同
友の法螺そのまゝ聞ける歳となり　滿洲　西垣錦風
云ひにくい地名覺える大戰果　同　同
笛太鼓どこに弔意が有るものか　同　山田青々子
火叩きの埃を洗う良い天氣　大阪　同
結婚はする氣卽答だけは避け　滿洲　同
歸還してのりの浴衣をしやんと着る　同　
興安嶺志士の血の跡意氣の跡　同　暮多猪三郎
なつかれて惜しいキヤラメル呉れてやり　同　同
帝政の名殘りルパシカ襟の垢　同　松岡委滄浪
レントゲン肋の骨に脈き〳〵し　青島　同
チト拗じれてるがと初診に釘を打つ　同　同
この醫者も癒した話たんと持ち　愛媛縣　
誰にでも行く兒で子守りもの足らず　佐伯　鷄城
海水浴場おゝ色繪具〳〵　同　同
叩いても〳〵春の陽の椅子　神戸　同
市場まで行くワンピース下駄を履き　平川　久枝
美くしい惱み女は書を習ひ　同　同
クロールのしぶき海軍志望です　同　同
産院の軸桃太郎掛けてあり　大阪　米田春童
獨身が切花買へば哀れなり　同　同
戀もなく只出納簿かきつゞけ　大阪　中北正朗
公傷の見舞は劍をガチヤつかせ　同　同
金少し有つて組長つとまらず　大阪　中西彌生
安產の祝積立口がふへ　同　同
二十二時未だ夕燒の西の空　滿洲　大阪清一郎
對岸を見つめてゐるとスパイめき　同　同
落つかぬ宵の灯を消して見てひとり　臺中　新谷一舉
白衣から見る婆婆みんな動いてゐる　同　同

汗と兵隊

强行軍汗へ笑顏のある餘裕　南支　米谷松太郎

映畫「男の花道」を見る

生還を期せぬ男の玉の汗　同　同
ほれ合つた男同志の術と藝　北支　宇敷桃水
見えずとも富士を見る樣な仕種もし　同　同

富士登山

入口と終點のある砂走り　大阪　西岡佳春
國策順應中山寺の流行ること　同　同

工場全燒

十萬圓燒けてからけしたんと出來　大阪　桝岡詩朗
增產の瑞穗の中の彥根城　同　同
酒飲まぬ眼に騷がしいビヤホール　岡山　岡田笛六
點數にして有難い形見分け　同　同
配給も切符もなれた嫁ぐ日へ　臺中　高山武士
養子待つ生活へ輕い咳があり　同　同
初年兵馬が笑つたのを知らず　和歌山　北垣神風
明日休むズボンへ霧を吹いてゐる　同　同
彈丸の下その體驗は美ましい　大牟田　上村十四之
圖書館のしじま頁を繰つた音　同　同
夕顏にゆかたのわたし吸ひとられ　大阪　中野延枝
蟬がなく蟬がなくとてかけまはり　同　同
移り氣な娘と人形思へども　香川縣　早馬清富
腕時計まいた時刻で止つてゐ　同　同
女ならもつと靜かに歩るけんか　京都　宮川春涉
男工と女工それから面白し　同　同
兩隣同じおかずの香に暮れる　大阪　宮田不二
擦れ違ふ電車男女の車掌笑み　同　同

歸朝　三三(19)
謙讓　三四(38)
苦學　三四(38)
こわがり　三五(30)
教師　三六(31)
勤勞　三七(31)
門出　三八(32)
肩揚げ　三八(33)
藥取り　三八(33)
かくれんぼ　三四(31)
歸還　三四(34)
組長　三四(31)
小走り　三四(31)
氣短か　三五(34)
氣合　三五(32)
機嫌　三五(33)
感謝　三五(32)

M

眼　三(12)　三〇(33)　三六(46)　一八六(19)　一九二(27)　一九四(18)　二一〇(31)　二一四(34)
無邪氣　四(12)
娘　七(16)　一八三(14)　一九〇(23)　一九六(19)　一九七(21)　二〇九(35)　二一一(32)　二一四(30)
盲門　一六(14)
萬引　一七(31)
名人　一八(14)　二一(14)　一九六(18)　二二五(28)
身の上　一九(12)　二一(56)　二五(49)　二〇五(32)
貰ひ子　二(16)　二三(31)　二三(49)
待ちぼけ　二(19)　二三(49)　二四(55)　一九七(22)
祭　二(20)　二四(52)
見送り　二三(11)　二七(33)

海軍官階の大改正
變らぬは月月火水木金金　和歌山　秋月　宏方

新字音假名遣ひ決る
文法は忘れてしまへとは云はず　同

友の死
世の中に眞心一つ消える宵　川口　伊古田伊太古

觀世音暑さ寒さをのたまはず　同

歸省待つとは嫁の話であるらしく　朝鮮　日高　呑神

能率の上らぬ顏をして戻り　同

大根と鞄と會社から歸り　青島　菖蒲　榮城

常會で決めた香奠もらふとは　同

派手な柄簡單服にくずすなり　松江　横地　初惠

海水着泳げる樣に見えるなり　同

神經が鈍い夏にて候か　松江　岡崎　祥月

拜啓の無沙汰インクの缺乏さ　同

下呂溫泉ニテ
温泉につかり尙感謝をば忘れずに　長野縣　前田　秋暮

療養と言譯をして温泉につかり　同　松村　實穗

御足趾たどりて鷲峯の峰寒く　大阪　同

徵用の荷物も輕く身も輕く　同

ゴーストツブ母を抱へる樣に越え　大阪府　東方　鷹丸

嘘言つた夜からあづさりふられたり　同　岩崎　勇記

增産は同じ心の庭の豆　山口縣　齋藤　三丸

趣味が多すぎて附合ひ難い義兄　大阪　菅原　秋帆

病人も突然起つて蠅を打ち　岡山　永田六龍子

白粉も女給としてのハタキやう　大阪　畑　清柳坊

戰線の話うちわを捨てさせる　大阪　渡邊　路風

地圖にない小島だけれどみのがす　大牟田　鍛永　晶平

俳句では食へず體操の先生にて　奈良　川岡　風情

ノツクして行商人が這入つて來　大阪　佐野　牛歩

痩せ腕になつても初救取つたこと　大阪　奥村正太郎

旱魃雨乞ひ
祝詞あぐ雲ある方へ向き直り　朝鮮　松田　幸士

アリューシャン上陸
ツンドラへ賴母しく立つ靴の紐　丸龜　高津　富蘭

二階借り今日の井戸掘殊勳甲　海州　山形　愚坊

考へて良い方云ふが氣の悪い　大阪　白紀　茶美

蚊帳半分つゝて子供は寢てしまひ　津山　粟井　蛙柳

讀經に似合はず僧は小柄なり　大阪　山口江浦草

暗らがりで易者皺の手ぬつと出し　大阪　松永　青雲

召され征く友が褌の目に痛く　大阪　山崎　晴之

川普は夜釣か淡い灯がゆれる　長野　堀内　敏郎

久し振り只肩丈をたゝかれる　上田　佐久間信治

乳母車押して噂の主任來る　島根縣　田中　弘穫

竝ぶのが嫌ひで損をしてゐます　大阪　恩賞　紀川

切符制延びて衣料の再檢査　松本　西藤　義春

峠から工場が見え海が見え　神戸　市川　治男

進上と云うて苦力の子を抱く　滿洲　佐野　卜占

腹匂ひも手當三圓稼ぎ居り　朝鮮　金浦　茂

重そうに西瓜を慾で持つて來る　大牟田　平島　平人

點呼場イチニイチニと歩く父　尼崎　中原　公子

神官も擧手で應へる點呼場　尼崎　大仁　研作

涼み臺何時もおんなじ相手なり　大阪府　岡野　重草

ことはりは何でも母が云ふときめ　池田　横川　良

點呼場丸刈と云ふ聲になり　京都　青山　明水

蜻蛉とり暫し不孝の子となりて　大阪　田川　迷

明日も又來いと別れる涼み臺　兵庫縣　前田　勇風

吊皮の隣何かを思案する　大阪府　毛利　珍幸

浴衣着で友達夫婦尋ねて來　中村　仙人

水溜り子供はわざと水をはね　兵庫縣　河野　甲東

合成酒どうのこうのと醉うてゐる　大阪　尾原　喜樂

耳打ち　二六(116)　一八〇(109)
一四(116)　二〇五(30)
丸刈　三〇(12)　五二(52)
六六(36)　一八〇(109)
一七(15)　一八七(117)
二〇(32)　二二(33)
無口　三三(16)　四五(51)
六七(46)　一九三(118)
見合　三九(16)　一九一(20)
妙齡　四四(59)
無理　四〇(32)　五七(51)
丸髷　四〇(33)　五五(35)
漫畫　四三(54)　五一(54)
無情　四五(54)
迷惑　四六(53)
一九六(16)
舞ざらへ　四七(46)
眞似子　四八(64)　五八(49)
迷子　四八(65)　一九七(22)
一八一(19)　五〇(58)
眼鏡　四八(66)　五四(54)
五三(54)　一二三(45)
餅つき　五八(44)
見舞　四九(59)　五四(53)
五一(51)
待つ　三〇四(35)
眉　五一(54)　一八三(16)
負け惜み　五三(50)
見はからひ　五四(49)
無駄　五五(57)　二〇三(17)
持ち前　二二四(31)
未亡人　五五(58)
夢中　五六(43)
モダンガール　五七(52)
土産　五八(49)
土産物　五九(50)
耳隱し　二一四(51)
六六(54)

—一二八頁中段へ續く—

初等川柳講座（八）

麻生路郎

前號「穿ちの句に就て」の續き

輝くや元より金に嫁せし身の（劍花坊）

白粉の下は光陰矢の如し（史　城）

むかしむかし稼げば樂になりしとか（豆　秋）

見つからぬ針姑に拾はれる（稍　露）

膝の子に貸せば扇子を逆にあけ（美津木）

ともかくもかついで歩く銀狐（水　車）

姑とそも〳〵揉める味の素（久流美）

「輝くや」の句は今は鎌倉の建長寺に眠つてゐられる井上劍花坊氏の句でありますが流石にとうなづかせられる句であります。私はこの句に接するたびに、筑紫御殿華やかなりしころの白蓮女史の美しさを想起するのであります。次いで、美衣をかなぐりすてた柳原燁子女史の清楚な姿を高田の寓居で見たことを想ひ起してほほえませられるのであります。この句が虚榮結婚政略結婚へ警鐘を亂打した名穿ち句であることは云ふまでもありますまい。

「白粉の下は」の句は、世の多くの女性の反省をうながす贈物として充分であらうと思ひます。深酷な穿ちの句として推奨し得る句であります

「むかしむかし」の句は實に皮肉な句であります。月月火水木金金で働いてもなほサラリーマンの路は墓まで續いてることを思はされるのであります。

「見つからぬ針」は「むかしむかし」の句ほどの深酷さはないが、皮肉に於ては決して前句に劣らぬのであります

「膝の子に」の句の穿ちは輕いユーモアを感じさせられます。

「ともかくも」の句は支那事變前の婦人心理を忌憚なくやつつけてゐるところに痛快味の湧く句であります。

「姑と」の句は今の安川久留美氏の句であります。この句は嫁姑の對立と共にある時代相を語つてゐる句であります。そのころの穿ち句としては上乘なものでありましたが今日の世相に於きましては穿ち句としての存在がなくなりました。斯う云ふこともあり得るといふ一例として示したのであります。

斯うして現代作家の穿ちの句を檢討いたして見ますと、昔ほどに油濃くはありませんが、優れた句と思はれるものには或は輕妙に或は深酷に、穿ちの味を盛り込んでゐることが判るのであります。どつちかと申しますと現代の句は一般に穿ち味が稀薄になり過ぎた觀があるやうであります。

可笑味の句に就て

可笑味（をかしみ）とはどんなものか——それから述べることにいたします。

ここに馬が一疋ゐるといたします。その馬の顏をジツと眺めると隨分長い顏をして居ります。しかしどの馬の顏を見ても矢張り長い顏をしてゐるので別段をかしいといふ感じがいたしませんが、そこに甲といふ人間が一人居るといたします。そしてその顏をチラと横眼で眺めたとき、それは〳〵長い顏をいたして居るではありませんか。人間の顏が長いからと云つて別に可笑しくもなんともありませんが外の人間乙丙丁と見くらべた時に、甲だけが一人莫迦々々しく長い顏なのです。その時フト馬の顏を思ひうかべたのです。すると思はず知らず微笑をいたしました。人間でありながら馬面をしてゐるなといふことが、をかしかつたのであります。

そうした思ひがけない共通點を發見した時に、人間は可笑味を感じるのであります。この場合の可笑味は形の類似から來る可笑味であります。例へば古句に、

神前の鈴ふんどしのとけたやう

と云ふのがありますが、これなどは、あきらかに形の類似から來た可笑味を捕えたのであります。ホンの一寸した共通性即ちだらりと垂れた布帛が長いといふ點で共通してゐるだけで、思ひも寄らぬ二つのもの即ち神前の鈴と褌とを首尾よく繫ぎ合はした手際による聯想からの可笑味なのであります。馬の場合も、これと同じであります。しかし可笑味があるからと云つて必ずしも名句だとは云へないのであります。それはこの句の場合がそれであります。

この句をジツと味つて見ますと相當に可笑味がありながら何故名句でないかと申しますと、藝術的な匂ひ、即ち詩的な美感が伴はないからであります。ただ可笑味を感じるといふに過ぎないからであります。句品が低いからであります。古句には斯うした句品の低い句がかなり澤山ありますから、可笑味があるからと云つて鵜呑みに推奨することが出來ないのであります。では可笑味と云ふものはそうした形の上の類似ばかりであるかと云へば、決してそうではありません。言葉の上から來る可笑味の句もあれば、擧動から生ずる可笑味の句もあります。

又、性格からの可笑味の句もあれば假裝による可笑味の句もあるのであります。

それがしも罷歸ると藝子しやれ

と云ふ古句の如きは、所謂言葉の上から來た可笑味であります。武骨な塊りのやうな侍の口吻を優艶な藝者が眞似たところに、この句のをかしみがあるのであります。單に口吻だけでなく、侍の動作までを眞似てゐる藝子の姿が目に見へるやうであります。今でも、給仕や若い社員が、社長の不在に、その椅子についてその口吻を眞似て笑はせることがありますが、いつの世にもかはらぬ人情味の可笑しさはあるものです。

同じく古句ですが、

鷄があくびをしたと聲いひ

と云ふ句があります。この句は、鷄が鬨の聲を告げてゐるのを見たのでありますが、聲の悲しさから、あくびをしてゐると感じてゐるところに可笑味があるのであります。尤もこの句の可笑味は類似の可笑味ではありません。同情すべき事象にぶつつかつて、感動した可笑味であります。同情されてゐる立場にあるものが、一向それに氣づかないところに可笑味が生じたのであります。

斯う考へて見ますと、可笑味と云ふものは、文字の上から來る滑稽と、想からの滑稽との二つに歸着するのではないかと思ひます。何れにいたしましても、句の構成が、意表に出れば出るほど、効果的であると云へるのであります。しかし、これでもか、これでもかと腋の下をくすぐつて笑はせるやうな可笑味は眞の可笑味ではありません。眞の可笑味は何等巧くまずして微笑、音笑、爆笑を招來するところにあると思ふのであります。可笑味の句でその的が外れると、多くは俗に云ふくすぐりの句に墮して、全く鼻持ちならぬ句となつてしまふものであります。作者一人が可笑しがつてゐるに過ぎないからであります。

次に現代作家の「をかしみの句」を擧げて、その一句一句から、作者はどんな點に可笑味を感じてゐるかを檢討して見やうと思ひます。

おそろしさ豚兒愚妻をオイと呼ぶ　（自由朗）

食堂の鏡三人俺が食ひ　（艸樂）

かまきりにまさか虎徹も拔かれまい　（不水）

㊗のお布施なりけりなむあみだ　（豆秋）

口開いて百圓札を見てゐたり　（滿潮）

醫者の來る迄醫者の來る迄の本にあわて　（自由朗）

守り札もろともチボにとられたり　（豆秋）

知事代理府廳に訪へば庶務の隅　（自由朗）

塵箱へ突つ立ち上り訣別す　（豆秋）

生きとりますと芋虫のびて見せ　（自由朗）

まだ幾らもありますが、これ位にいたして置きます。

「おそろしさ」の句を一讀いたしました時に、思はず苦笑を漏らしました。そして、この苦笑には反省があります。亭主の苦がり切つた顏が髣髴として迫つて來るではありませんか。聲をあげて笑へない可笑味です。それは作者自身哀れむべき自己の姿を發見するからであります。

それに反して「食堂の鏡」の句は思はず音笑することが出來ます。尤も作者自身は微笑か苦笑かをしたでせうが。

「かまきりに」の句は、可笑味の句であると共に諷刺の句でもあります。作者としては自重反省の句でありませうが、第三者は、かまきりの如き弱者に對して虎徹をスラリと引き拔いたありさまが、イヤ引き拔かうとして力んでゐるさまが、微笑に値するのであります。

「㊗のお布施」は同情すべき事象への感動から來た可笑味であります。低物價政策で押へられてゐても、イヤ適正價額だとか、何んとか云つていつのほどにか諸物價は騰つてゐるのであります。しかし僧侶への謝禮は依然として、九・一八の㊗でおさえられ、ビタ搖ぎもしないのであります。これはひとり僧侶の問題でなく、この種の謝禮によつて生きてゐる人たちに共通的な惱みなのであります。出す方では、それに氣づかぬ筈はなく、知つてゐても、知らぬ顏でゐるのであります。それが出す方にとつて都合がよいからであります。新聞紙が値上げが出來ぬので紙を減らして事實上の値上げをしたやうに、僧侶の讀經も勢ひ時間の短縮が行はれてゐることは想像に難くないのであります。つまり「經二分話一分盆の寺（自由朗）」の句が、よい證據であります。僧侶も食はずにはゐられないからであります。近ごろの句には斯うした社會の缺陷から來る可笑味の句が見うけられるのであります。

「口開いて」の句は、その一生涯に於て、百圓札を手にすることの出來ない階級の人たちの擧動が、露骨に描出されてゐるところに可笑味があるのであります。これなどは考へやうによつては聲をあげて笑へない事象なのでありますが、百圓札に心を奪はれ、一瞬放心狀態になつてゐるところに、人間の淺猿しさが出てゐて可笑味があるのであります。

「醫者の來る迄」の句は、表現技巧から來た可笑味の句と云へるでせう。醫者の來る迄といふ應急手當の本をパラ〳〵とページを繰るばかりで一向それらしいところが、出て來ないので、あわてゐるその擧動から來る可笑味もあります。しかしこれとても聲をあげて笑へない可笑味です。現代句に微笑や苦笑の句はあつても、音笑や爆笑を招來するやうな句は尠ないのではないかと思はれます。句が尠ないと云ふよりも、今日の社會狀態が、そうした句を作る作家を抱擁するだけの餘裕を持たない情勢に置かれてゐるのではないかと思はれるの

であります。しかし、笑ひのない人生は寂びしい人生であります。冷めたい人生であります。堪え難い人生であります。求めて暗い人生に生き、好んで憂鬱な顏をする必要はなからうと思ひます。その點可笑味の句に浸つて、出來るだけ笑ひのベルトの回轉を旺んにして欲しいと思ひます。

「守り札もろとも」の句は財布を盗られたのは兎も角、護つて呉れる筈の守り札も一緒に奪られたところに、をかしみを感じたのであります。俺は何んと云ふ間の抜けた人間であらうと云ふ自嘲もそこから出て來そうです。

「知事代理」の句は、人生の裏を、まざ〳〵と見せつけられた可笑味の句であります。曾て、知事代理として祝辭を朗讀し、招宴に臨んでは豪放に乾盃した人を、府廳に訪ねて見るとなんのことはない庶務の一隅に、小さくなつて、ひそひそと談すと云ふ始末に、思はず微笑を漏らしたと云ふのであります。斯うした矛盾は今の社會にはザラにあることではありますが、考へると可笑しくなるのであります。

「塵箱へ」の句は文字の可笑味なのであります。事件そのものは、なか〳〵可笑しいどころの騒ぎではありません。嚴粛そのものであるべき筈です。その嚴粛な訣別の場面へ、塵箱といふやうなものを擔ぎ出したところに、可笑味が飛躍したのであります。しかも、その可笑しさが擴大すれば、するほど、應召兵の眞劍さが感じられるのであります。

「生きとりますと」の句は自嘲の句かも知れませんが、何んとなくユーモア味たつぷりの句としてうけとれるのであります。

大體、をかしみと云ふものは人が主體でもあり、客體でもあるのでありますが、この句位、人間と云ふものをハツキリと見せて呉れた句は稀れなのであります。

ルンペンを世間の人達は侮蔑的な眼で眺めてゐますが、ルンペン自身は「生きとりますと芋虫のびて見せ」なのであります。

要するに、可笑味の句を作らうとして作つたのでは、すぐれた可笑味の句とはならないのであります。可笑味と云ふものは捕えやうとすれば逃げて行きます。常に同じ所にあるものではありません。

古句の「おさえれば芒放せばきりぎりす」なのでありまして、よき可笑味の句は容易に作れるものではないのであります。

こちらが無心でゐる時に、放心の狀態にある時に、ひらりと身を躍らして、姿をあらはすものだと云へるのであります。しかしながら、常に感傷的である人のところへは決して姿をあらはしません。そこには明るき人生を目指す人たちへの心構としての示唆が多分に含まれてゐると思ひます。

窓 ―― その一

▼知識より、ガッシリした身體をつくれと云ふ聲が擡頭して來た。

▼鍊成鍊成で、半裸體の團體が街を走る。今年の夏の海水浴は特に賑はつた。

▼親爺の嫌ひなパーマが、姿を消した。女性の衣服が一般に地味になつた。

▼朝日の野球が文部省の野球になつた。

▼水槽にボウフラが湧いた。敵機が本土に來襲しないシンボルである。

▼米作良好。

▼車内隣組運動は徹底しない。親切すぎると薄氣味が悪いからである。

▼南海電車も二十四時制を實施し、驛名の敵性文字を消した。外人の姿を殆んど見ない線なので、はじめから裝飾文字に過ぎなかつた。

（不死鳥）

川・柳・書・架 (84)

小運送隨筆 わだちの跡

後屋敷保啓

▼本書は小運送並びに其の關係記事の隨筆であるが、隨處に關係のある川柳を採錄してあるのと、附錄として「川柳漫語」六十餘頁が卷尾に附してあるので、本欄に紹介することとした。

▼本書の目次概要を左に掲げやう

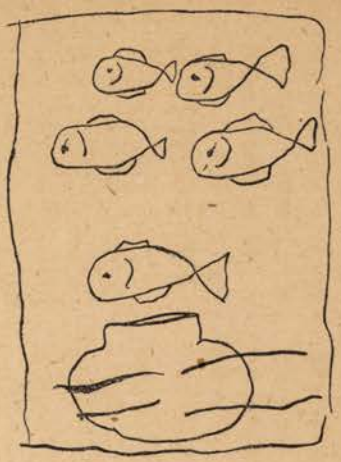
小運送の語源・飛脚雜話・丸通記號の由來・豪勢を極めた茶の運送・支那で拾つた話・巨石運搬の話「くるま」雜考・きやり音頭と大木の運搬・「なかのりさん」と筏流し・お江戸へ運んだ六つの花・空を飛んだ林檎と松茸・水を運んだ珍らしい話・小運送に緣のある小咄・（附錄）川柳漫語▼昭和十六年十二月一日發行、B列6號判二四八頁、定價一圓三十錢、東京市京橋區楓町二ノ五、隨運研究社發行。▼著者は鐵道省の官吏、川柳人協會員。本書は一般川柳人にも輕い讀物として一讀をお薦めしたい。

窓 ―― その二

▼女學校から英語を追放。お玉杓子ほど痕跡を殘した學校もある。

▼東京の電車の中で學生が外字新聞を讀んでゐるのをとがめた親爺があつたが、ソレはドイツ語だつた。

（不死鳥）



柳川 世界史 (XVII)

戸田孤篷

(二二) 宗教改革

神は神、人は人

モーセの十誡はモーセに返せばいゝ。若草燃ゆる春の太陽の眞下でピチ〳〵動く薔薇色の肌を踊らせてゐたい。それがルネツサンス。しかし汚れた心臟はとうてい娘心を取戻すべくもない。

坊さんの或る日やは肌あこがれる
童心は童心大人は大人なり

ドイツの場合

夢に憧れる皇帝、ローマを憧れて神聖ローマ帝國の一枚看板をよう下げない皇帝をほつたらかしにして、法王に直か談判を始めたドイツ。

法王へ氣儘の癖り云ひに來る
晩鐘が鳴れはゴチツク拜まれる
甘えてると見えぬ强訴がまだ續き

焚刑

法王に楯ついたイギリス人ウイクリフは骸骨になつてから焚刑に處せられ、ボヘミヤのフスは生きたまゝ火にかけられる。

棺桶から出して火刑臺にのせ

免罪符

ヒユマニズム軍の增援隊は諷刺や皮肉の彈丸をこめて遠距離、近距離の射擊を始める標的の一つになつた免罪符。せんど悪い事をしておいて法王様から免罪符と申す此結構なしろものを僅かなお金を出して分けていたゞくと立所に罪業消滅してしまふ。無電で地獄の廳と連絡がとれてゐたかどうかは寡聞にして知らず

法王も漫畫になれはいゝ男
免罪符買ふ爲にする貯金です

ルーテル

このとても有難いお札の効能書の上に罰あたりな髭文字で九十五箇條の反對の文句をべつたり張りつけたのが肥つて牛みたいなドン百姓マルチン・ルーテル。挺でも動かぬ面構へに畏れをなしたか焚刑にも出來ず、理屈攻めに攻めたものゝ、この納辯に齒が立たず、いたずらに彼のごつい手に握られたバイブルの行方を見守るのみ、バイブルが讀めんからインチキ坊主に迷はされるんだと幽囚の爐邊で聖書の獨譯を完成する。

土百姓どん百姓にある正義
ルーテル入城もそつとそこをどいてくれ
焚刑といひかけ咽喉に引縊り
聖書獨譯小鳥が密へきゝにくる

信教の自由

新教はお嫌ひだが兵隊はほしい。越境して來た敵軍を打つためには信教の自由の手段も要る。亂が修まれば良狗煮らると云ふ譯。皇帝の實力がなくなつたのか、法王がたよりなくなつたのか、こんな事を繰返してゐる内に段々馬脚がはつきりして來た。ルーテルは間もなく大往生をとげるが、もう彼が居なくとも新運動の進展に支障ない程影響は全歐にひろまつてゐた。

僧兵の指南麓は馬を棄て
又信教の自由ですかと式部官

新教 舊教

宗教は生命の糧だと云ふ。パンの爭ひも顏負けする程血の匂の連續。舊教自體の改革も行はれる。十字架を立てた船が出る。

酒藏の酒とは別に賣り止める
聖人の眞似も法王させられる
十字架と象牙とダイヤととつかへる

海賊王國

舊教の御大スペインからオランダが獨立したのも、御自慢の無敵艦隊が海賊の主魁ドレークに滅されて、海上覇を制するのバトンを英國に渡さざるを得なくなつたのも、新教の自由を求めて新天地へメイ・フラワー號が發つたのもこの時代

風取うつかり開けて指が飛び
叱られてさつさとのれんつゝかへし

で英蘭教會と云ふのがローマ教會から緣を切つて出來上る

メリーさんもアルマダさんも首が飛び

(註) スコツトランドの女王メリー舊教徒にかつがれて斷頭臺に上るアルマダはインビンシブル・アルマダ(無敵艦隊)

暴風雨に半分程は手傳はせ
一瓶のラム(酒)は氣附と張つておき

(註) メイ・フラワー乘船者は清教徒として嚴格に酒をいましむ

シエクスピーア

海賊の親方の親方がエリザベス女皇、世界史にのこるシエクスピーアを育てたことはほめてやつていゝ

大根役者の思ひ出もかくシエクスピーア
悲劇書く齡には悲劇出來上り

神樣を忘れた世界を扱つたハムレツト。シエクスピーアの警告も何のその、その後のヨーロツパの運命を暗示する

神樣を見失なうなと見失ひ

草木徒然

西田艸樂

源三位頼政と草木

變な標題である。源家の嫡流、古今の武將頼政たるものが、草木なぞを玩んでゐた樣に聞えるかも知れないがそうではない。尤も英雄閑日月あり、古來勇將武人の、時に草木を愛したる事例稀ではないが、我が源三位頼政の草木關係はそれとも違ふのである。といふ譯は此の武將折に觸れ詠んだ歌が奇しくも草木に關係を持ち辭世の一首まで四回に及び、これ俗史の語り草となつて古川柳方面では面白く囃し立てる。

頼政もあやめ抱くとは露しらず　古句

彼の有名な鵺退治の恩賞として頼政は豫て心をよせて居た女官菖蒲前を賜る。然るにその時二人の同年輩女官と共に同じ衣裳で出され、間違ひなく菖蒲前を引抜けとの事であつた。

五月雨に池のまこもの水増していづれあやめと引そわづらふ

の一首を物した。

この關係の古句が

いづれとは少し菖蒲の不足なり

やはらかにどれがあやめと源三位

鵺とまアどう一つにとあやめいひ

なぞがあり、次は

うらみぼい歌はかりよむ源三位　古句

で、保元の亂に勳功を立てながら、特別の恩賞にもあづからぬ處から

人知れぬ大内山の山守は
木がくれてのみ月を見るかな

と詠じたので心情を察せられて四位に叙せられ、昇殿を許されたものゝ、この位もほど經て不足を感じ

上るべきたよりなければ木の本に
椎を拾ひて世を渡るかな

の一首に心三位を望んでゐるそこであくたいな川柳家が

源三位あくせく二合ほど拾ひ　古句

が、彼が漸つと三位に叙せられたのは七十五歳の老齢で

もう一首ねだると二位になるところ　古句

そう簡單には行かぬどころか、その次に詠んだ歌こそ悲愴なものである。此の晩年に及んで以仁王を奉じて平家討伐の兵を擧げたが、戰ひ利あらず、ついに宇治平等院の扇の芝で自刄の際は

埋木の花咲くこともなかりしに
みのなる果を哀れなりけり

今更の如く知つた自己榮達の一念こそ、却て身を亡す起因、大東亞戰爭に國民一億が持つべき心構へのよき教訓である。まことに古川柳が云ふ如く

椎の木で榮え茶の木で終るなり

彼一生草木との緣がはなれないのは一興ある話であるまいか。

蓮のさまざま

一ケ月あまりも雨の顏を見ず、眞夏の太陽は容赦なく照りつける。夕凪の無風の一時今日も夕立が來そうなつたと恨めしそうに團扇をばたつかせる。それでももう盂蘭盆が近づく、七夕は過ぎたしそのうち心地よい涼風が訪れるのも遠くはなからう。それを樂みに暑い日中ではあるが風通しのよい所へ机を持出し盂蘭盆を前に一つ蓮の文學でも綴つて見やう。

渡來の花。

盂蘭盆の佛に立てる花としてなくてならぬ蓮の花、その他蓮は佛樣の花として、その美しさにもなにとなく緣起よくは眺められぬ所がある。繪なぞにも佛に因んだものゝ外には描かれる事がない。元來印度、埃及あたりの原產で、日本へは佛教の渡來と同じ頃に來たものと見られる。或はもつと以前から來てゐたかも知れないが、古い歌なぞには多く現はれてゐない。しかし全然ない譯ではない。古事記の雄略天皇の條に引田部赤猪子の歌が載つてゐるのや萬葉集には

ひさかたの雨も降らぬか蓮葉に
滯れる水の玉にかあらむ見む
（卷十六）

等でかなり古くから日本にあつたにはあつたがもとからあつたものではない。

引田赤猪子の歌とは

日下江の入江のはちす花はちす
身の盛人ぞしきろかも

といふのであるが、これについては、可哀そうな物語がある。

天皇がある時美和河に行幸ありしとき、河邊に衣を洗ふ童女があり、容姿麗しかつたので、「汝は誰が子ぞ」と問はせらるゝに「己が名は引田の赤猪子」と申すと、嫁がずに居れ今に喚ぶであらうと仰せられたが、その後、赤猪子は今か今かと待ちに待つて八十年に及んだ。しかしもう餘命も多からぬ今、自分の情をせめては天皇にお告げ申さではとお尋ねしたのである。天皇は以前の事を打忘れてゐ給ふて、いたくお憐みになり、ひどく年を取つてゐるから御結婚はなされなかつたが、種々の贈物を賜ひ

引田の岩栗槽原若くへに率寢てましもの老ひにけるかな

今一首と共にお與へになつたその御返歌に奉つたのが前掲の赤猪子の歌である。

このあたり、花はちすとたゝへ、葉に滯る露の玉なぞ、美人にたとへてゐて、佛樣の

花だと云ふやうな見方でなく素直にその美しさを賞讃してゐる。

元來佛樣に捧げる花といふ事が、その花の美麗なといふ事が第一の要素でなくてはならぬので、近頃白隱禪師論語といふ本を讀んだが、それに禪師はかういつてゐる。その大意は、人の心は濁世の泥中に埋れてゐるが、佛法に精進して泥土を抽き出でゝ大空に向ひ香ぐはしくも又美しく蓮の花の如く咲くのである。佛に奉るのも、かうした人心の表現である。佛樣と蓮のいはれが判る樣に思ふ。

七月號の「川柳雜誌」の「大和篇」の橘寺の條蓮華塚なんかも有名な傳承で、太子の勝髪經を講ぜられてゐる折柄から天より大さ三尺もある蓮の花が舞ひ降つたなぞは佛法興隆期の日本の傳說らしいものである。

佛教信仰に結びついた蓮華の傳說には今一つ當麻寺の蓮の曼陀羅が有名である。今も國寶として大切に扱はれてゐる當麻寺の一丈五尺の蓮の曼陀羅は、傳承するところ天平寶字年間、右大臣豐成の娘中將姫が御佛の手引によつて、蓮の糸を使つて織出したといふ、極樂淨土の有樣を現はした曼陀羅で、昭和の今日に尙ほこの傳說を眞向否定する學者がなく、第一經糸緯糸は絹糸だらう。その當時こんな大巾物を織る織機が日本にあつたらうかと、名だたる學者達が研究の最中であるらしいが左樣な事は筆者には容喙の資格はないから、古川柳でも引出して傳說を傳說として置かう。

蓮根を馬でつけ込む當麻寺　古句

江州野州郡田中村、大蓮寺の境內蓮池の蓮を使つたといふ。蓮根を馬でつけ込むといふが勿論蓮根にもあるが蓮の糸は莖を折ると蜘蛛の糸のやうに細い糸が引けるもので、それを集めるのであるから何分百駄の蓮が入要であつた。だから

當麻寺機のあまりが蒙になり　古句

當麻の總柒曼陀の切れつはし　古句

細い糸を拔いたあとは、庫裡へまはされたであらうとは川柳子のいつもながら逞しい想像である。

どなただと中將姫はまぼしがり　古句

一度雲雀山に捨てられた中將姫は、その後髪を落して當麻寺に入り尼となり「吾正身の阿彌陀佛を見ずは此の門を出でず」と決心した。五六日經つた時、其容氣高く、どうしても此の世の人とは思へぬ一人の比丘尼が現はれ、「其方に淨土の彌陀佛を見せてやるが、それには百駄の蓮莖を集めよ」との言ひつけ、早速その旨朝廷に奏聞すると、二日の後に荷がつけられた。すると例の化尼は自分で一々蓮莖を折つて糸を取出し、新らしく作られた井戸の水で洗ふと糸は燦然として五色の光を放つた。それから五六日たつて又その化尼が來つて織機を設け夜の十時頃から曉の四時には幅一丈の絹が織上つた。そこで化尼は三把の藁に酒二升を浸して火を燈し新尼の中將姫に捧げる。見るとこれはありがたや極樂淨土の有樣がすつかり織出されてゐる。時に右の化尼こそは西方の教主觀音大士なる事を證し、「汝の志に感じこゝに現はる、汝これにより永く三途の苦を離れるであらう」と言ひ殘して西方に飛び走つたとある。だから

呉服屋に無いものを拜む當麻寺　古句

である。尙ほこの蓮の糸に關する句に

煩惱菩提蜘蛛の糸蓮の糸　古句

を照會して置かう。これは煩惱は蜘蛛の糸で菩提は蓮の糸といふので、煩惱の方は例の衣通姫の、「吾が脊子が來べき宵なりさゝがにの、蜘蛛のふるまひ今宵しるきも」であり、菩提の方は同じ姫でも中將姫の事を言ふ。

遊女に譬ふ。

蓮が泥中に生じながら、花を開くや百花をして顏色なからしむるは、身は泥水稼ぎの苦界にあつて容貌、觀世音菩薩の如く美しいのに譬へられる。この處又古川柳が引かれる。

泥中の蓮を拔いて船で切り　古句

なんていのになると泥蓮でもすごい。一介の遊女でありながら名も心も高雄、奧州きつての大主仙臺樣でも意にまかせず遂に隅田川の三叉で吊し切とはきれいな蓮だ。これに引かへ十六代目の高雄は長い物には卷かれて見やうと姫路の城主柳原式部大輔侯に引拔かれて池の中ならぬ池の端の圍ひ中でぱツと咲いた。

三叉の後は冥加な蓮を見る　古句

果報いみじく御物見て蓮を見る　古句

これは大阪に緣があるからもう一句

池中のはちす田植の神事也　古句

住吉の御田植に今は新町あたりの蓮ッ葉が出るが昔は乳守の遊女であつたと。

川柳子の觀察。

川柳が詩であるかどうだかこゝではお預けして置くが今日の川柳よりははるかに詩的要素の乏しかつた古い川柳にも、觀察の鋭い點では感じ入るものが少くない。

母親の勘當蓮をおつぺしより　古句

なんかゞそれだ。母親の勘當なんて放り出した極道息子の歸ることばかり念じてゐるもので、どこをどう廻つて今どうしてゐるかを見はなすまいとする一縷の望みとあきらめぬ心は、恰も蓮の莖を折つて見た形であるとは旨いことを言つたものである。それから

蓮根はこゝらを折れと生れつき　古句

ユーモアたつぷりな眞實味ではないか

讀賣の笠冬枯の蓮のやう　古句

全く冬枯の蓮の葉は街頭に立つて大聲の讀賣子の笠と見立てたところ巧みな描寫である。

佛像を刻む小刀は蓮の露で研ぐといふ。

（つづく）

東京耳目

福田山雨樓

昔ある有名な盗棒の親分がゐました。その盗棒の息子が相當の年頃になつたので、親父に向つて「一つ極意をさづけてくれ」と頼みました。それではと云ふので某夜、親子二人だけが忍びに出かけ、とある豪家にまんまと忍び込みました。寶のある部屋にたどりつき大きな長持を見付けました。親父はその錠をうまく明けて、「それではこれから極意を授けるからお前はこの中に這入つておれ」と申しました。息子がその中に這入ると親父何思ひけん、外から錠をかけてしまひ、そのまゝ立去つてしまひました。さあ息子は困りました。親父奴ひどい事をするなと腕を拱いて考へ込みましたが、流石は名人と云はれたほどの盗棒の息子です。遂に一計を案じました爪先で鼠がかぢるやうな音をさせました。そのうちに家人が眼をさまして、吃驚し、灯をともして調べたが鼠が外から入つた形跡がない。これはおかしいと云ふので錠をあけて見やうとする途端盗棒の息子が飛出したものですから、家人は吃驚して腰をぬかしました。その隙に乘じて表に出で、庭の燈籠の石をかゝへて井戸の中にドブンと投込みました。それ盗棒が井戸の中に飛込んだと云つて家人がさわいでゐる間に息子はまんまと逃れて我家へ歸りました。見ると親父はいびきをたてゝ寢てゐました。起して一部始終を話すと、「それでお前も一人前の盗棒になれた」と云つたといふ事であります。勿論これは寓話なのですが、碧巖錄をあらはした高僧は、この話をたとへて禪の教へはこのやうなものだと申されたと云ふことであります。

○

昨夜は東洋協會主催の海外事情講習會を聽きに行きました。稻原勝治と云ふ外交通の方から國際情勢を聞きました一時間半原稿なしで話された内容は、さう耳新らしい事ばかりではありませんでしたが話は仲々うまくいくらでも聞いてゐたいと思はれるほどでした。思ふことがする〳〵と出て來て、恰度立板に水の如くよどみなく流れるのであります。トピックやエピソードの取り混ぜもうまく調子も高からず低からず、しかも語尾がはつきりと齒切れよく如何にもそつのない講演でありました。手慣れたと云ふ圓熟味がうかゞはれるのでありました。しかし話終つて、休憩の時間に後の聽講者の評判を聞いてゐると「話はうまいが話にまとまりがなく研究のあとがない、しやべりつ放しである」と非難してゐました。次に講演された東日副主幹吉岡文六氏のお話は「大東亞政治建設の構想」と云ふ演題で話し振りは何だかたど〳〵しく同じ事を繰返したり、言ひそこなつたり、現地から歸られたばかりで相當疲れられてゐたせいもあり、一寸聞き苦いところはありましたが、その内容は、あとから思ひ浮べて見るとたしかに卓見であると感服した次第であります。視察に深き洞見があつた事を思はせられました。例へば支那事變を目して武漢三鎭後は主として物資獲得戰であると喝破したあたり流石であると感心したのでありました。

○

八月一日の午後から栃木縣の烏山と云ふところへ出張致し今朝歸京致しました。恰度二日の日曜には錦地で不朽洞會が盛大に催されてゐるであらう、とあれこれと想像を逞うしながら猛暑を征服しつゝ仕事に大車輪の活動を續けました。烏山は舊城下でありまして鮎の名産地、二晩ともうんと御馳走になりました。東京から約三時間半、かなり奥深い山間の町ですが、山野の翠巒に白雲悠々とたなびいてまるで故郷の山河に接するの感がありました。こゝに來て特におどろいた事は、土地の人々が如何にも落着いてゐることでありました。夜電燈の線が切れて眞つ暗になつても平氣で沈着に修復の事に從ひ決してあはてません大きい聲一つあげませんでした。大國民の襟度と云つたやうなものをおかに感じて、われ〳〵の輕卒な焦燥感を痛く恥ぢた事でありました。尙この前こゝへ來る迄に寶積寺と云ふ驛で烏山行の列車に乘り換へたのでありますが、そこでも僅か二輛の客車に何百人かの人が詰めかけておりながら、只默々と詰合つてみんな乘り込んでしまひました。何だか心を磨かれる思ひが致しました。

○

聊か手前味噌でありますがこの頃小生は炎暑と闘ひ乍らかなりの活動を續けております。恰度今年は鐵道開通七十周年に相當しますのでこの秋の十月十四日には全國一齊に盛大な祝典が開催されます。その準備やら計畫やらを小生等の係が中心になつてやつてゐるものですから、連日大多忙で土曜日曜もなく、大車輪でやつております。朝も必ず

八時十分には登廳し、晩は大抵六時過ぎまで頑張つております。その間玉なす汗を拭きながら調査に立案に打合に少しの小休止もなく頑張つております。大阪にゐた時分にも小生は相當に頑張つたつもりですが、その頃はまだ若く元氣も潑剌たるものがありましたが、このごろはしみ〴〵と年をとつた事を感じ、無理でない限度においてベストを盡しております。こんな話はさぞお聞苦しい事と思ひますが小生にして見ますれば自分は斯う云ふ多忙の中で生きるやうに生れついてゐるのだ、これが自分と云ふもの丶人生なのだと諦觀して、その中に浸り切つてわき目も振らずやつてゐるのでありまして、決して自慢でも誇張でもなく、正味かけ値なしのありのま丶なのであります。そしてこの姿こそ時局下國に盡す唯一の本分であると思つております。その忙しい間にも川柳のことは折に振れては思ひ出してゐます。今日もある鐵道の大きな工場へ公用で參り、そこの掲示板に短歌、俳句の募集があつたのを見て、いきなり事務所へ飛込んで、川柳の話を持ちかけたものでした。

○

『人々が現在一番ほしがつてゐるものは笑ひであると思ふが、今までのやうに人間の馬鹿氣た動きからくる笑ひでは駄目だ。情愛から湧いてくる笑ひでなければならない』これは八月五日の東京日日新聞の三面で『讀者と記者の談話室』欄へ『近頃の映畫は面白くない。せつかく一日の疲談として紹介した言葉の一節であるが、われ〳〵川柳人としても大いに味はふべき言葉だと思ひます。川柳はユーモアを忘れてはならないと路郎先生も屢々句會などでもお話になつてゐられましたが、眞面目藝術運動が叫ばれる毎にユーモアの方面は兎角閑却され勝ちになるやうです。よきユーモア、素晴らしいユーモアが生れなくては川柳の大業性は失はれます。この春の『川柳雜誌』で路郎先生が書かれた戰線の秀句にはユーモアが多分にあり思はず微笑されました。あ丶云ふ川柳を望んで止みません。

川柳 解題と句例

＝選 路郎＝

(27) 白墨

★白墨はチョークとも墨筆とも呼ばれてゐる。

★學校の教室に無くてはならない白墨は明治六年に大阪の舶來雜貨商がフランスから始めて輸入したものである。

★そのころマッチの製造に失敗してゐた杉本卯之助といふ人が、白墨の將來性に着眼して、明治八年に製造に着手したのである。

★白墨は燒石膏に炭酸カルシューム（白墨）を混和し水を加へて泥物狀とし、これを一定の型に流し込んで製造したものである。色白墨は燒石膏の溶解水としてアニリン染料を使用するか、又は普通の白墨を染料溶液に浸して着色するのである。

解説のしまひにチョーク投げる癖　路郎

服につくチョークの粉は彈じかれる　白面人

身邊雜記

安川久留美

大きな渡團扇をすかせば漸く見える日の丸の旗――そして右から「躍進日本」と書いてあるのをふと左からよむ、「本日進躍」ハテ何のことか判らないが……先月路郎さんの右書、左書の一家言、仰せの通りと思ふ、なるべく堅書にするのが日本式？驛名の假名書の横文字は左右の差によつて滑稽に詠まれることがある。たとへば金澤の次驛千代尼で名高い「まつたふ」など逆によむと「ふたつま」非人道主義の標本のやうだ。

×

公園の茶亭に赤の女夫犬がゐて近く犬ころを七匹生んだ生れて一週間目ぐらい漸く眼のあいたばかりの仔犬が母の乳房をさがしてクツク泣いてゐたが一つづ丶乳房を見つけた時、どうしても一匹丈けお乳があたらない、即ち母犬に七つの乳が見えなかつた――然し八犬傳は八ツ房の乳といふ、ハーテ犬の乳房は六だつたか、八だつたか、どちらにしても取り殘された一匹の仔犬は鍵の取りはづれ、宴會の末席で暫し配膳の遲れた人のやうだ、上座は氣早く既う箸を割つてゐる。いつの世にも「取殘され」ものはある、公平の文字それ至難なる哉。

×

故井上劍花坊氏初の金澤入りの時、その歡迎句會を兼六園の寄觀亭に開いた。當時主人に懇望されて揮毫の短冊が二枚いつの間にやら襖の交ぜばりとなつてゐた。幾星霜後寄觀亭の經營者も變つてしまつた。去年の秋、その短冊が誰かに巧みに剝ぎ盜まれてしまつた、その一句は「蛇にまかれる花の鐘」といふ道成寺をよんだものだつたやうに思ふ、罪人よ、鐘の中の安珍となる勿れ！

ルービヒサア
大日本麦酒株式會社

（寫眞說明）前列向つて右から…樂鈴 雨絲 堂角 雙孤 巢春 人茉 白人 郎路 乃蔑 秋豆 々銳 光翠 介之玲
後列向つて右から…潤滿 波涉 蓍清 天雪 美雅 白彩 子桑 八歩 春林 美知夫 友帆 船帆 ア ー ト 松樅 小 路丹

柳界の松陰塾

路郎門の柳星集る

―一七年度不朽洞會總會の記―

灼熱の太陽の下に於ても趣味人は常に健全である。八月二日午後一時から、上本町大福寺の大廣間に於て誇りの高い傳統と、獨得の性格を持つ「川柳雜誌」の不朽洞會の總會が開催せられた。

○

風雅な廉越しに、時雨の如く蟬の聲が溢れる。

定刻―一同着席。石井白面人氏司會の下、國民儀禮が嚴肅に行はれ、續いて委員長戸倉曹天氏が起たれて

「わが不朽洞會は路郎先生を中心とした師弟の關係に於て成立するものであり、且つ會員相互の親睦を圖る機關として出來たものであるからそこには何等權利の主張とか特別の義務の負擔などはなく只管師弟の交情を溫め併せて純然たる趣味性の向上に資するのが目的である」と先づ不朽洞會が、柳界に二つとない特異性を持つた會で、路郎先生に私淑せる人々の集り、卽ち柳界に於ける松陰塾とも云ふべきものであることを說かれ、更に語を續けて「とは申しながら、われ〳〵不朽洞會員と川柳雜誌社とは密接不可分の關係におかれて居るので、從つて雜誌の消長には多大の關心を有し、喜びも悲しみも共にわかたねばならないと思ふので少しく雜誌の現狀を一ト通御話したい」とて、昨春の柳誌統合時代都下數誌を一つにせよとの當局の慫慂をうけられた際にも、わが路郎先生に於かれましては柳誌の減少による川柳の衰退を憂ひ國策とも睨み合はして、せめて二誌を殘すことを當局へ請願されました結果、先づ「川雜」のみは先生畢生の事業として獨自の存在を許され、他の同人誌は數誌併合して一誌となる、つまり二誌を殘すことによつて、國策に順應されたのであります。而して今日毅然として純潔無垢な「川柳雜誌」の刊行が續けられて居るのも、偏に先生の不斷の御努力に依る所であり、社は素より誌友・會員の面目之れに過ぎたるは無いのであります」と統合問題に觸れ、再び語を轉じて社の經營上、先生の苦心の尋常ならざるものがあることを縷々詳說され「然し私は路郎先生の御人格並に御名譽に對して皆樣に直接御援助を哀願するものでありませぬが恒に先生の御健康と「川雜」の隆昌發展を祈りたいのであります」と述べられ、次いで來るべき昭和十八年は先生の川柳生活四十周年、「川柳雜誌」の二十周年に相當すること、不朽洞會の會員數が創立當時に比して三倍半に激增したこと、等々について語られ、最後に田村壽伯のビルマの話があります。御清聽と御歡談をお願ひしたいと結はれた（一同拍手）

引續き、路郎先生の挨拶は川雜の歷史と經營上荊棘の道を歩まれたこと、しかし川柳のためには今後の難局に對しても不屈不撓の精神を持つて努力すること、不朽洞會の大家族主義のこと、川柳に於ける主義主張のこと等々について熱意を以て語られた。最後に本日の不朽洞會總會が斯くも盛會に開催されたことの感謝を述べられるところの先生の眼には光るものがあつた。（一同拍手）

○

曹天氏座長席につかれ本日の協議事項を會員一同熱心に協議した。曹天氏の名座長振りと會員一同の熱心なる協力によつて協議事項は難なく片づく。

▼不朽洞會委員を不朽洞會中央委員と改稱（從來委員は京阪神在住者であつたが、全國及び海外在住者の範圍に擴大）▼中央委員の增員（中央委員中より常任三名）▼副委員長を設ける定員二名▼記念事業は麻生路郎句集の刊行（不朽洞會が推進力となり、別途に麻生路郎句集刊行會を創る）及び記念川柳大會開催のこと決定、

以上で協議を終り、

同席上に於て左の如く新選者を發表

石井白面人氏・戸田孤蓬氏・尾崎方正氏

○

路郎先生・曹天氏別席に退かれ役員詮衡中に、一同句作。新役員發表に次いで、選句「怪談」の披講をされた。時に五時二十分。

不朽洞會役員

（委員長）戸倉曹天（副委員長）橋本綠雨（同）奧村丹路（常任中央委員）石井白面人（同）橋本波夢造（同）須崎豆秋（中央委員）福田山雨樓、岩崎柳路、寺井銳々、大西八歩、戸田孤蓬、水谷鮎美、市場沒食子、吉田水車、石倉根民郎、正本水客、黑川紫香、北川春巢、西尾琴、田中風葉、濱田久米雄、清水白柳子、多田市多樓、遙見灯竿、植山九天、鈴木石鹿、月原宵明、野口柳太、浪玲之介、河野夜王、武部春林坊、河田一將、八竹正柳、村上角堂、高田抱遙

―休　憩―

六時から再會。庭前で一同記念撮影。（竹莊氏幹事の一人として夕餐斡旋のため撮影に洩れる）一同夕餐「田村壽伯のビルマを語る」は同氏が昨夜陸軍省からの招電により急遽東上されたとの電話に接したので、急にプログラムを變更、指名漫談會となり次々にバトンが飛んで快談奇談珍談にしばし時を忘れる。

次で路郎師の柳界時事の講演があり、不朽洞會總會の最後を飾られて幕を閉ぢた。時に午後七時二十分。

（玲之介記）

追記―張家口の會員岩崎柳路氏から祝電がありました御聲援を謝します。

同舟近詠

松山　前田五健

法螺の貝案外やせた男なり
樹や草も退屈だらふ月のぞく
煙突はかくもまつすぐ秋の澄む
奉仕から歸る子の汗母拭ひ
町内の風景となる防砂、水
床の間の花にもいつか秋のいろ
世の渦のどのあたりまふ我なるか
タイピストこれは嘘だと知つて打ち

金澤　安川久留美

地下食のランチへお氣に入りを伴れ
摺り生姜まじない程は冷奴

朝鮮　池田可宵

豈はからんや部隊長殿句をほめる
歳ごろのいつか淋しい花が好き

兵庫縣御影町　長崎柳秀

卑下すればするで尙更侮どられ
振り返る度びに女は小さくなり
氣の弱い母にすまない口答へ
笑ふ子へ抱き手の多い隣り組
ひゞの入る齡と醫者は取りあはず
いきなりにそばかうどんか出來ますか

奈良縣龍田町　嶋田翠峯

子供もう西瓜を切れば丸はだか
子供等に長き短き夏休み
配給をやもめ暮しはまた忘れ

神戸　潮田明坊

能書能文一徹の氣性也
預金帳この頃ひとり見て笑ひ
八合目雲の中とは氣が附かず
夏休み五十四帖を出して來る
椰子の葉蔭原住民は笑ひ好き

名古屋　鈴木可香

涙して閣下油井へしばし佇ち
子等いつか數へ違へる貨車長し

長野縣須坂町　高峰・柳兒

夏羽織着る身落つき見せて居る
戀の懸引公衆電話へ縋り
轉業の陽燒を汗を讃へられ

山口縣　三原狂路

洗ひ髪お下げにしてる妻と娘と

・鹿井縣小濱町　村田眉丈

開業醫電話の鈴も怖く疑る
東京の客もろともに蚊をいぶし
外人が一人も居ぬにBARBER'S SHOP
藏の鍵こども捕手の眞似をする
みだれ籠孔雀のやうに帶を解き

急性・慢性
化膿症
丹毒・濕疹・瘭疽
外傷化膿・乳腺炎
扁桃腺炎・中耳炎
蓄膿症・齒槽膿瘍
急性・慢性　トラホーム
急性・慢性　淋疾
化膿性　婦人科疾患
…等に對し本劑は内服により化膿菌克服作用を發揮す。從つて、止膿・止痛・解熱を迅速ならしめ、根元的なる治癒を促進せしむ。又、副作用少く應用は安全、容易である。
アルバルジル錠
内服短期奏效・病原療法劑
三〇〇錠
五〇〇錠
一〇〇〇錠
製造元
山之内製藥株式會社
東京市日本橋區小舟町二
大阪市東區高麗橋五
OP16

ジーペの協川 柳界 展望

催

▼本社句會は八月七日午後六時半御津八幡宮で開催▼松坂倶樂部麻生路郎川柳講座は九日、十六日の兩日午後一時▼有恒倶樂部川柳講座は廿二日より二日間高野山清淨心院に開催された同倶樂部學藝部十二講座綜合の夏期錬成大會に參加▼阪大川柳會は廿五日午後四時▼大阪警察病院川柳會は十一日午後四時▼大阪遞信病院川柳會は十五日午後二時、以上何れも路郎師出席▼川雞尼崎支部句會は廿六日午後六時尼崎昭和荘で開催水谷鮎美氏出席▼川雞神津支部句會は廿二日嶺泉居に於て開催▼阪神電鐵産報川柳會は十九日午後五時西宮産報會館に開催▼川柳きやり吟社では廿六日より五日間に亘り新宿三越に於て「兒童と川柳書展」を開催▼朝鮮川柳協會では來る九月中旬「大東亞戰爭完家川柳展覽會」を開催、いづれも路郎主幹出品。

消息

▼路郎主幹は堺市が郷土出身の將兵に贈る慰問册子「戰ふ堺」に自作の時事川柳と其解説を執筆された▼村松夢想氏（不朽洞會員）は日本樂器製造株式會社大阪支店の支店長事務取扱に昇進された▼須崎豆秋氏（不朽洞會員）は八月十三日生野鑛山へ出張、柳信を寄せられた――生野は山に圍まれ、きれいな川が流れて靜かないい町です。「とんがらし屋」といふ旅館があり、看板を見ただけで汗が引つ込みました。「ヒンヤリと生野は銀の風が吹く」▼川柳大陸社（大連）では皇軍慰問號を發行、前田五健氏（松山）が表紙「武運長久」の畫筆を執られ、路郎主幹も慰問原稿「兵隊さんに捧ぐ」を執筆された▼西田卿樂氏（不朽洞會員）は八月十四日夜植物採集のため日本アルプス方面に向はれ上高地から柳信を寄せられた「燒岳は科學せにやならぬ煙が出」▼蛭子省二氏（光州）は八月中旬鮮内を旅行されたが京城には十日間滯在され同地川柳人の歡迎による座談會に臨まれた由▼森東魚氏（北京）は豫て胃腸を害し病臥されてゐたが漸く快方に向はれた由御全快を祈る▼和田默然人氏（北京）は此度北支を引揚げ横濱へ荷物を解かれたが目下ほ各地を旅行、健康保持に努められてゐる由▼津田麗月冠氏（京城）は八月十一日不朽洞を訪問、路郎主幹と歡談され、路郎夫妻は夕刻から歌舞伎座の五郎劇へお伴した。▼西いわを氏（大阪）は八月六日から十日まで信州から越中への山旅をされた。▼橋本波夢遣氏（不朽洞會員）は上京中に病氣再發

社の回覽板

★昭和十七年度不朽洞會總會は八月二日午後一時大福寺に於て盛大に催された。

★二日の總會に於て左の如く新選者の發表を見た。

大阪　尾崎　方正氏（阪大川柳會出身）
同　石井白面人氏（松坂倶樂部川柳講座出身）
同　戸田　孤蓬氏（同）

★不朽洞會新會員發表

姫路　小川靜觀堂氏（石鹿氏紹介）
芦屋　田邊　由布氏（鮎美氏紹介）
尼崎　長谷川三司氏（同）
大阪　野元　吐堂氏（同）

★岩橋双虎氏は家事の都合上、退會されることとなつた。

★不朽洞會はいよ〳〵ます〳〵健實な會となつて來た。不朽洞會はある意味に於て柳界の松陰塾だと云はれてゐる。眞面目に川柳の研鑽をされたい方の入會をお薦めする。入會希望の方は會員の紹介によつて申込まれたい。

募集句　一路集

形見　かほる選

銀時計父の形見と聞かされる　平人
形見分け數に入れない顏も來る　市太樓
形見など無くて兄弟仲が良し　かつみ
山小屋へ忘れた杖が形見なり　猪三郎

父さんの形見の菊を挿芽する　千斗
お祖母さんの形見純綿貰うて來　彌生
母の手で形見異議なく分けられる　東狂子
碁敵の形見碁盤を屆けられ　惡源太
形見分け佛は何處にゐるだろう　信治
好敵手だつた人にも形見分け　牛歩
形見分け歌舞伎へ行つた時の柄　不二
何よりと形見氣持よく受けて呉れ　止朗
淋しさは形見の寫眞笑うてゐ　鐘生
形見抱き夜汽車にそつと泣いてゐる　同
（佳）ヒーローが形見孤獨に耐へたひと　三津雄
（同）イニシヤルのラニングシヤツ形見にそ　光影
（同）迷心を嗤ふ形見の櫛が缺け　波人
（同）小姑の眼が眞劍な形見分け　千斗

―一七頁下段の續き―

胸算、六九（41）
耳　七七（39）一八四（16）
耳　一九六（16）
耳鼻　一九一（19）
耳垢　三一〇（31）
魅力　九三（48）
命令　二一〇（61）
面會　二一三（51）　二一三（32）
　　二一五（31）
松の内　一四四（70）
道草　一八〇（18）　一九（21）
　　二一五（31）
名刺　一八二（15）　二〇四（32）
無心　一八三（14）
滿員　一八五（15）　一九（21）
　　二〇七（33）　二一三（28）
脈見習　一八五（15）　一八七（16）
無表情　一八七（16）
間違ひ　一八八（17）
ママ　一八八（19）
虫歯　一八八（17）　一九五（18）
枕　一八九（19）
持逃げ　一八九（19）
命日　一九〇（21）
目的　一九二（27）
物足りぬ一九三（23）
眞心　一九三（18）
桃割れ　一九四（18）
向不見　一九五（17）
儲け　一九六（18）
眞顏　一九七（22）
迷信　一九七（22）　二〇八（32）
娘心　一九九（22）
無造作　二〇一（21）
睫毛　二〇五（31）
名案　二〇五（32）
名士　二〇七（23）
待人　二〇八（31）
見榮　二一（31）
未教育　二一四（31）
モヒ患者二一五（34）

目下東京にあつて療養につとめられてゐる由、一日も早く全快を祈る。

慶弔

▼德永雅美氏（不朽洞會員）は八月廿四日長女洋子さんを儲けられた。

▼藤井鼎淵氏夫人（大阪）が永眠された、哀悼の意を表する。

轉居

▼高鷲亞鈴氏は大阪市住吉區山坂西之町三ノ二三藤村方

▼平川久枝氏は神戸市兵庫區永澤町二ノ一八二石川方へ

正誤

▼前號七頁下段廿八行目は「白髮染してパーマしてくだぶれた」と訂正

▼同一六頁上段二行目「二重丸君を悼む」の前書は削除

▼廿六頁下段廿五行三字目は森の誤り

新刊紹介

皇國歌百首

山本顧彌太編

▼本書は武士道歌五十首（古歌）、大東亞戰爭歌五十首（現代短歌）を合纂したものである。昭和十七年七月三十日再版發行、B列6號一八頁（非賣品）大阪市東區南久太郎町二丁目一九山本顧彌太商店發行。

廣告稅便覽

山宮宗親編纂

▼本書は大阪財務局間稅部第三課長山本牢五郎氏指導の下に戰時の新稅で、而も難解な廣告稅を編者が懇切に解剖したものである。廣告業者はもとより、新聞雜誌の出版業者にとつても裨益すること多大である。

▼昭和十七年八月二十五日發行B列6號一七五頁、頒價一圓五十錢、大阪市東區北濱二丁目二五大阪廣告通信社發行。

（同）肘突が形見となつた机なり　丸太棒
（同）形見分け後は交際せぬ氣なり　臥牛
（同）形見等氣にせず次男支那に居る　清富
（同）先生の形見の軸へ菊を生け　春童
（軸）一通り形見を揃へ莫にし　かほる
（同）小抽斗二つ形見の中へ抜き　同

易者　大研子選

易者のひとことといやにつきまとふ　一人
易者の娘不幸な家へ嫁きあはせ　紅之助
藥瓶提げて易者の灯をのぞき　龜水
易者さへ身の振り方に迷つとり　抱逸
好い事も云つて易者は金錢になり　方正
夫には內證で八卦見てもらひ　竹莊
易者今日花見歸りにひやかされ　沒食子
女難の相ありと易者にひやかされ　神風
終電車易者小さく荷を纏め　かつみ
先生と呼ばれる易者の長い髮　猪三郎
お隣の子の名を易者賴まれる　千斗
事もなく易者の云ふた月もすぎ　彌生
客寄せに丁稚の手相强いて見る　東狂子
辻易者今夜の事は占はず　丸太棒
俺の氣を知つてる樣に易者云ひ　林業子
明日の日を占ひながら店をしめ　呑神
二三回易者の前を行きかへし　惡源太
辻易者に一瞥くれて角帽子　一滴
テーブルは古い箱なり辻易者　可學
易者の黑子を客がほめ　牛步
轉職へ易者の智慧もありました　信治
見て欲しい顏を易者の見逃さず　鐘生
まだいゝ卦出ずに易者を續けてる　三丸
おでんやの灯を借りに來る易者　春童
わが運をある日易者は考へる　青々子
泰然とほこりの中に辻易者　肱水
どう易の出たか易者の途中下車　鷄城
易者らし鬚も乘つてる終電車　數馬
こつそりと來て艶つぽい易を訊き　雲平
科學とは別に易者の人だかり　不二
手相見る客を舞妓等易者にし　乙平
眼の動き易者そこからぼかしとき　喜由
惚れるまで待てとは易者氣がながし　同
（佳）ローソクに實績がある易者なり　不二
（同）易者まだ宵といつた肱を付き　正朗
（同）串カツへ更けて易者も顏を出し　沒食子
（同）本當の咳を易者もする日あり　柴光
（同）不倖せなだめて易者ゴを出し　同

新發賣
消炎鎭痛濕布藥
粉末エキホス
主治効能　感冒、肺炎、肋膜炎
氣管支炎、扁桃腺炎、中耳炎
ロイマチス、神經痛、打撲痛
捻挫等
今般エキホス姉妹品として發賣したる本劑は專らその藥効竝に持續時間の永續に留意して製造せるものにして用法も至極簡便、安全なる粉末濕布藥なり
一、本劑は長時間使用出來るやうに工夫してありますから持續時間は任意にして支差へありません
包裝
100瓦
250瓦
500瓦
壹瓶
エキホス姉妹品
C-PEI9

廻★轉★椅★子

路郎生

▲句作の秋に入つた。

▲八月號は莫迦にうけた。殊に特別原稿の「泳ぎ」と「貯金あの手この手」は肩の張らぬ讀物として面白がられた。執筆者の勞を多とする。

▲滿洲國境の寒さや暑さに、もはや馴れられたであらうところの澤田四郎作博士から「あべこべの問題」と云ふ面白い原稿が屆く。面白い原稿で兵隊さんを慰める計劃が、コレでは面白い原稿で慰問されてる形だ。無口の馥乃に留守宅を訪ねさせ、「どやあつた」と訊いたら、「お母アさんが來てはつた」と至極簡單な返辭。さては大和から、お孫さんたちの世話に出て來られたんだなアと僕がうなづく。

▲武玉川研究は初篇が二三回、二篇が三〇回、三篇が三五回、四篇が三〇回となつてゐる。それに五篇研究の前號までの三回を加算し、本號から（一二二）として發表することとした。各篇とも一句一句の研究であるのと、いかに長年月の研究であるかが、一見して判る便宜上、蟹子省二氏からの希望もあつたので斯く改めたのである。

▲大西八歩氏が句を、福井哲氏が撮影を、つまり川柳と寫眞のタイアップで一つの味を出さうと試みた川柳寫眞——それが遂々、哲氏自ら句を作るといふところまで來た。本號卷頭の川柳寫眞がそれである。

▲西田艸樊氏の「草木徒然」、戸田孤篷氏の「川柳世界史」の續稿に、夷一笑氏の「氣違ひ踊り」、安川久留美氏の「身邊雜記」、福田山雨樓氏の「東京耳目」等々々、いつに變らぬ多彩ぶりである。それへ拙稿の「初等川柳講座」、「川柳の近觀・大和篇」「柳祖に告ぐ」其他がある。ここもと懸命の執筆陣である。

○

▲近ごろ前書の句が少し多過ぎると思ふ。一度前書を捨てて讀んで見て眞に必要なものだけにとどめて欲しい。

▲時局便乘派の柳誌を見てゐると、大衆に手をさしのべて引きずられてる形だ。それでは全く意味がない。表現上、思想上魅力のある作品を發表して時局人の心に餘裕を與へてこそ、眞に川柳報國なのであることに思ひをいたさねばならぬ。僅に十七音字をならべて提灯持川柳や宣傳川柳や標語川柳に浮き身をやつしてゐるのを見ると全くなさけない氣がする。そんなものが文藝であつてたまるものかといふ氣がする。

▲菊池寛氏が「日本の母」といふ訪問記事を新聞に書いてゐるが、新聞記事を一歩も出てゐない。出てゐないどころか、あんなものは新聞記者に書かした方が遙かに巧い。母を書くと云ふより菊池寛自身が顔を出すからいけないのだ。菊池寛が書くからいいのだと云ふ人があるかも知れぬが、それは一つの迷信で今時そんな催眠術に罹る人はゐない筈だ。菊池寛には菊池寛の畑があることを知るべしである。私の町會で大金を出して双眼鏡を買つた。何にするのですと、訊いたら、飛行機の襲來にそなへるのだと云ふ。識が見るのです。あなたは經驗があるのですかと訊いたら、無いと云ふ。その眼鏡で飛行機を捕えることが出來る時分には肉眼でハッキリ見えますよと云つたら、成る程なアハハハと笑ひ出した。笑ひ事ではない。そんな無駄をしていいのかいと反問したくなる。私は何んでも併は併屋主義である。

○

▲文學博士藤村作先生が、國語審議會の委員を辭退された。反對意見を述べて奥れるなと云はれたのだそうだがそれでは何のための委員だか判らない。左横書も新字音假名遣ひも一般に不評判である。閣議が決定しても世間が實行してくれないやうな案では全くの閑潰しだと云はれても仕方があるまい。それなら審議會で反對意見も述べさせ、愼重審議の結果否決された方がましである。

○

▲私は八月の十五日から、足に黴菌が這入つて外科の厄介になり、それ以來出社しない。出社しないが忙しさは變らない。足の痛むのを辛棒して執筆もすれば、揮毫もした。無理に句會へも出かけた。人力車を利用して高野山へも出掛けた。三輪から長谷の方へ行つた。揮毫で一番嬉つたのは滿洲開拓民慰問の短冊であつた。朝から午後四時までかかつて一氣呵成に百枚書き上げた。その足ですぐ依頼先へ渡しャレ〳〵と思ふと胸が痛んで、吐き氣を催しそうである。函大の新學長本庄博士の歡迎會に出席したが、フラ〳〵でビールにもサッパリ味がなかつた。翌日ボンヤリとして暮らした。しかし私としての全力を擧げた課であるから惡い氣持ちはしない。あの短冊の一枚が橋本克海氏の手に渡るやうなことがあつたらどんなにか愉快だらうなどと想像を逞しくしてゐる三日目には三日目にはちゃんと元のからだになつたので今度は執筆の方に心血をそそいだもう足の痛みもとれたボッ〳〵出社の準備をはじめやう。

窓 —— その三

▼人間の性格には一つのことをやらせて置けば幾らでも默々として續け得られるのと、絶えず違つたことをやつてゐないとすぐ飽きが來て能率があがらないのとの二つがある。つまり融通性のきく人と、きかぬ人、要するに事務的なのと創造性の二つである。この二つの性格を昭和維新にいかに活かすかといふことが大きな問題だと思ふ。

▼思つたことを何んでも正直に云ふことの出來る人と出來ぬ人とある。正直に云ふことだけでも非常な勇氣がある場合があるし、默つてゐると云ふことには非常な忍耐を要する場合がある。ホントに生きるといふことは難かしいことである。

（不死鳥）

麻生路郎著
新川柳評釋 定價〒 〇・八〇 〇・〇八
本筋の川柳で一粒選りの名句を薦め、その一句一句に、不朽不離の評釋がしてある。

石曾根民郎著・麻生路郎序
句集 大空 定價〒 一・〇〇 〇・〇八
著者は信州の人。心の底にじつと懐いてゐたものを素直に吐き出したといふ個人句集。

麻生路郎著・柴谷宰舟畫
累卵の遊び 定價〒 一・〇〇 一・一二
名句に名評釋がしてあり、類例となる句が澤山薦めてある漫畫三十二葉挿入。

戸田孤篷著・麻生路郎序
柳川二千六百年史 定價〒 〇・九〇 〇・〇八
著者一人の創作・詠史川柳の尖端をゆく。

堺市出島海岸通二丁一八二
發行所 不朽洞
振替大阪三〇三九二番

各地柳壇

いのちある句を創れ

投稿清規▼用紙は原稿用紙▼文字を正確に▼開催月日及場所記入▼締切は毎月廿五日▼投稿先は本社宛

本社八月例會

八月七日　於　御津八幡宮

我が社八月例會が七日午後六時から御津八幡宮に於て開催された。作句錬成で鍛夏を兼ねた句三昧、多數新進の顔も見え、殊に支部員同伴の支部幹事は作句の傍ら句會の進行にまで盡力され作句道場の和やかさが顯現されて當夜の柳話は路郎主幹が「廻轉椅子」と題し生活から拾はれた偶感を漫談風に話され爆笑ところ〴〵におこり涼味豐かに午後九時すぎ閉會した。（幹事）

出席者（順不同）

路郎・翠光・玲之介・帆船・覺榮・寄眞史・正路・紫香・潮花・綠葉・翠花・湊万・乙平・默平・夜王・一也・不二・秀溪・博也・三司・愛子・フミ・孤蓬・掬夫・一笑・八歩・千斗・吐空・白面人・翔奎・栞・アート・葭乃

席題「猿」　五選

ある日ふとニュースで猿が踊つてた　一也
小休止猿も背囊から下りて　翠光
人間の動物園と猿思ひ　玲之介
猿ある日キャラメル貰うた夢を見た　潮花
一ト目見て猿は逆らふ人と知り　默平
猿の世も暴君あるを見て戻り　夜王
氣の荒ぶ日か親猿は子をいじめ　默平

席題「男」　紫香選

ある時は男の意地で損をする　夜王
產盛は日本を背負ふ男の子　潮花
ニュース館男の涙見てしまひ　寄眞史
男ならせめて赤道通りたし　綠葉
丸刈にすれば女がけなるがり　白面人
俺も男だ甲種合格　正路
四十すぎ髭をのばさうかと思ひ　白面人
男なら華府を空襲して見たし　不二
土囊あげ男の意地の力瘤　千斗
兎も角も一つぶ種の男の子　一笑
配給の炭は男の手にかゝり　三司
はつきりと別れ男はふりむかず　潮花
出征の留守を男の子が生れ　翠光
眞直に立つて男の別れする　紫香

席題「定期券」　默平選

服變へて定期きつちり忘れて來　綠葉
衣更あぶなく定期券氣付き　不二
夕刊の戰果に睦る定期券　千斗
定期券表情もなく突き出され　潮花
四五人がつゞいて降りる定期券　紫香
後三月ゆける定期を捨てゝ嫁し　潮花
定期券見せずに頭下げて出る　帆船
光陰のはやさを知つた定期券　一笑
改札へサツサと向ふ定期券　不二
定期券ついでの用を頼まれる　紫香
眠て居てもきつちり降りる定期券　玲之介
定期券ふと道順を替へて行き　八歩
定期券本當の戀をのぞかれる　潮花
定期券蛙の驛へ急ぐなり　寄眞史
月給の事にもふれる定期券　同
定期券實直相な靴の音　八歩
人生のたかばを定期券と行く　不二
定期券器用な手付で一寸見せ　默平

兼題「習字」　夜王選

汗ふきて課長の習字ほめ合ひぬ　秀溪
ハンマ振るこの手習字も習らうてる　寄眞史
お習字の半紙でかんだらしい鼻　不二
一心に出來た習字の横に母　靑空
軍神の遺品に薫る習字帖　千斗
五十過ぎ感ずるあつて書を習ひ　白面人
習字鬪ます母の手は墨を磨り　默平
もとかしい習字に勇士が泣かされる　治男
子の習字慰問袋に一つ入れ　三司
優とある習字張られた家が空き　紫香
お習字の陳はきつちり揃へられ　翠光
子の習字一億一心太く出來　三司
習字する字句も銃後の心掛　默平
習字する子の憂紛にへつてゆき　帆船
字を習ふ趣味へ娘のつゝましき　博也
習字する子に蚊遣火が伸びてゐる　吐空
なるほどと思ふ通りに朱筆伸び　伊田
先生はこうだと習字聞き入れず　三司
運筆へ重なる師の掌あたゝかし　千斗

兼題「苦勞」　路郎選

轉業のなれぬ苦勞へ手をみつめ　翠光
學資送る苦勞嬉しいものゝうち　栞
苦勞性やたあと弟言うて去に　同
苦勞性天氣のことが氣にかゝり　香林坊
大學を卒業させて春に死に　白面人
子の苦勞親の苦勞とまた違ひ　紫香
孫抱いて取越苦勞するもよし　一笑
慰問文苦勞してゐるとは書かず　默平
えらい苦勞しとりまつせと酒の艶　玲之介
ニュース館錦後の苦勞まだたより　正路
闘還兵白髮の殖えた母見付け　默平
長男の苦勞が足らぬ手紙見る　帆船
苦勞した昔もあつて石の門　不二
御苦勞と唯一言の擧手の禮　吐空
苦勞性でずと出戻り氣にかけず　潮花
編輯部紙の苦勞へ貰昏れる　不二
苦勞など聞けば白衣は笑ただけ　寄眞史
連れ子して女覺悟の苦勞する　潮花
苦勞から知つて嬉しい仲となり　翔奎
苦勞した社長の過去にはげまされ　小城子
この苦勞子にはさせまい鞄持つ　栞
苦勞した話へ口が滑りかけ　香林坊
御苦勞〳〵親目那練れてゐる　千斗

雜川　神津支部句會（大阪）

七月十二日　於乙平居

一鍬を耕すさへもまめが出來　香林坊報
土の香が手節足節から匂ひ　林笑
土となる覺悟で行かう指導員　湖心
外人の名に許されし金指輪　乙平
第二世アメリカ人でない惱み　若榮女
ヨルダンの水を忘れたルーズにて　アート
靑い眼で見た日本に狂ひあり　同
喫ゞりと手つゞも剛たジャヴァの子等　林笑
夕涼み照空燈を數へて來　香林坊
風鈴もだんまりでゐる夕涼み　林笑
夕涼み去年の夏は母も居た　雁水
死んだ子を見つけた母の夕涼み　風情
同

夕涼み去年の話など彈み　湖心
夕涼み團扇ばかりが動いてゐ　同
補裝路にぬくみが殘る夕涼み　若榮女
歸農して故郷の土になりきれず　アート
外人が初めて知つた日本刀　一夢
米の俘虜愛嬌撒いて荷を擔ぎ　伊太古
日本に居る外人が世辭を言ひ　風情
樞軸の外人だけが日本に居　湖心
夕涼みむつつりとした娘も交り　アート
初サラリー大人になつた氣で貰ひ　操
婿養子月給袋のまゝ渡し　一甫
月給と相談しろと叱られて　嶺泉
女事務月給ぐらいは着てしまひ　同
サラリーをあてにしてない女祕書　同
月給日小供の方が待ちこがれ　山本宗
月給の上り物價に追つけず　青洞
月給と同じ値段の服を着て　乙平
サラリーは幾らと見合聞かれたり　風情
稅金に遣い月給袋なり　翠光
月給の十圓上が君と呼ぶ　不二
月給日何處へ行つたか一人者　香林坊
薄給の官吏まことによく動き　同
團體が解かれ二人は別な道　雁水
二人して普讀となるいゝ便り　不二
倦怠期などありそうもない二人　翠光
家の子が氣に掛つてる二人連れ　伊太古
二個連れと云はれて嬉し許婚者　乙平
初めから喧嘩する氣ちやない二人　茶堂
泣く相手笑う相手となつた君　香林坊
西瓜番今年はどこの畑に居る　湖心
ストローは西瓜の種と遊びける　香林坊
西瓜賣叩いてほめて割つて見せ　一甫
西瓜切る母が待たれぬ手を叱り　若榮女
秋風の庭へ淋しい西瓜の芽　同
增產の爲だ西瓜の無いもよし　同

雜川　下關支部句會（下關）

七月十二日　牛休報

長門一宮福王寺吟行

玉葱へ僅かながらの肉を借り　草路
玉葱の大きく見ゆる肉なし日　井蛙
肉が無くなつて玉葱へ蓼が付き　米三
蟻の道寺は靜かな風が吹き　市多樓
蠅一つひろさをかこつ畫の寺　井蛙
無花果の事無く熟れる寺の庭　不川
霜目に靴跡つけて寺を出る　九呂平
寺に來て佛心の湧く過去を持ち　鯛好坊
玄關へハイと裸の返事だけ　同
裸にもなれず副示の汗をかき　米三
ビール買ふ苦心も聞いて呑まされる　柳子
新婚の夏をビールで笑せる　終始
子を膝に家庭ビールの栓をぬき　白陽子
珍客へいゝ井戸水を持つ誇り　不川
珍らしい客のあるらし靴の音　嗣朗
集金と一緒に珍客這入つてき　水客
立話日陰の方へ少し寄り　同

山口縣道々場吟行（七月二十八日）

濕泉を出て蟬の音に立ちどまり　牛休
煤煙を離れて此處に蟬を聞く　遊記
蠅取紙午睡に狹い四疊半　井蛙
蠅取紙子の出したのに多く着き　曉霧
蠅取紙小豆を撒いた樣に取れ　三輪
御馳走の番をしてゐる蠅取紙　恒生
いらだつた氣へ蠅取紙役立たず　市多樓
次々に驛の灯を消す終列車　恒生
一足で今終列車出たところ　利滿
交代がちと遲過ぎる終列車　光輝
終列車皆長旅の人らしい　哲志
トンネルが出來て終列車眠むられず　柳星
終列車出て滿月の入るホーム　市多樓
母らしいまだ終列車待つて居る　代志雄
終列車膝をくずさず娘が眠り　恒雄
責任のある交代に念が入り　牛休
責任は重しあこ紐掛けて立ち　井蛙
責任を果せば珠數をもむ心　勇記
增產へ七十肌の母の汗　良雄
增產に妻の手足のたくましき　三輪
休む日もなくケーブルの動く山　市多樓
除草機で遺兒も立派に御奉公　哲志
勝ち貫くと言ふ日本の米が出來　牛休

雜川　小郡支部句會（山口縣）

公電もかれての覺悟驚かず　井蛙報
とりあえず來たと電報の次を聞き　井蛙
日本晴若荒鷲は振ひ立ち　恒生
日本晴阿蘇の噴煙だけが雲　凡平
銀翼のはゞたく空は日本晴　曉霧
監視哨今日も事無き日本晴　井蛙
柄杓つけて水出してあり登山道　凡骨
水泳で目ばかり光る頑健さ　喜樂
增產の映畫蛙の聲に開け　茶目坊
雨乞ひは蛙にまかせ踏む水車　井蛙

雜川　梅田支部句會（大阪）

七月二十二日　鮎美報

斗風追悼吟

君は逝き柳の秋もおとづれる　一也
あの二階君死ぬまへの部屋でした　吐空
川柳に生死誓つたよき往生　治男
君の訃を聞く日日向葵重くたれ　三司
惜まれて彌陀の淨土へ居を移し　靜波
君逝けど柳誌に君の生きてゐる　遊步
惜しい人これからと云ふ時に死に　方眠
線香の火におもかげのうすれゆく　鮎美
釋政敎斗風を想はぬ日とてなき　同
合掌のたゞ線香に賴りきり　同
香煙の行衛さびしき鐘の音　秀峰
若死へ矢車草の朝の露　清子
あの世でも子のハト笛を君よ吹け　三司
若死の顏眠る如く見え　行春
若死の覺悟の遺書がまた泣かせ　靜波
若死のうはさ蚊やり火よくけむり　由布
若死へ笑顏ばかりが浮んで來　綠葉

雜川　堺支部小集句會（堺）

於　春陸居　角堂報

ひまな醫者朝から將棋の客が來る　昌坊
ここいらでおとゝ置けと醫者は云ふ　竹生
風邪ですとアッサリ博士云うて去に　角堂
聽診器かけて獨りで合點す　春醉

雜川　四ツ橋支部句會（大阪）

七月二十七日　翠芳報

將軍も遺骨に會へば馬を降り　青雲
將軍と知つて白衣は涙ぐみ　綠雨
軍神の家で將軍泪する　美奈子
將軍の髭が汚れて勝ちつゞけ　同
敗走で心苦しさ秘めてゐる　朗舟
敗走が續き英米何處へ行く　いづみ
敗走を思ひの儘に狙ひ撃ち　翠芳
戰略と云ひ〳〵敗走續けてる　同
陰たから祈る心を手紙にし　香林坊
アベックの山は途中で廻れ右　翠溪
山登り服裝丈は立派なり　山人

雜川　三池染料支部句會（大牟田）

七月四日　於　早鐘講堂　蝶人報

ブランコの上から客の入りをよみ　初舟
サーカスへ客を集める擴聲機　草兵
輕業の女笑つて幕が閉じ　道夫
輕業を見て來た夜の肩のこり　天風
酒の上腹を立たせてまづくなり　平人
速力がたくてよかつた脫線車　龜水
脫線は土工二人で清むぐらい　梅春
脫線のこゝらで夢のさめてよし　龜水

偶にする子の戸締は戸を叩き　抱逸
㊙の家賃に雨戸もひつかゝり　同
とは知らずトンボは蜘蛛の巣にかゝり　茂州
蜘蛛は留守ゆれる小虫は必死なり　梅春
死んだ振りして蜘蛛は助かる氣　天風
ふと見ればもう張つて居るクモの糸　天秀
蜘蛛の巣が張つて貧家といふ感じ　紅之助
蜘蛛の巣に蟬はかたしい聲で鳴き　草兵
蜘蛛の巣へ木の葉の不漁つゞき　國玉
揺手に蜘蛛やつつける習慣を持ち　道夫
手ぬかりはないかと蜘蛛は見て廻り　國玉
張つた網蜘蛛は待機の姿勢とる　一葉

櫻島支部句會（大阪）

八月十三日　秀溪報

能率の上らぬ友も殘業し　眞星
殘業へ妻は驛まで迎へに來　翠花
殘業は時計の針に氣を置かず　潮花
賴母しく母が見てゐる子の泳ぎ　秀溪
海邊では肩書も無い丸裸　利美
クロールが上手になつて海が好き　春生
弟の兩手西瓜を重く見せ　一作
斷髮にふさはしからず西瓜喰ひ　小丸
滿員車西瓜は棚の上にのせ　湊万
井戸の中西瓜の網が弱く見え　白鳥
配給になつて西瓜の味をほめ　無哲坊

豐中支部句會（豐中）

香報

風鈴が少しゆれてる夏の風　青峯
家近く口笛を吹く若さ　清泉
武庫川の鮎の味知る寶塚　松月
寶塚思ひ出のあるベンチ　迷
鮎釣りへ歌聲がする寶塚　甲東
丸刈に帽子の型のまだ殘り　重之助
故辭の母しのぶ夜空に月はさえ　雀草
涼み臺負けた將棋は下駄をはき　稔幸
夕涼みこの味ひも日本丈け　伸
涼み臺花火線香へ妻の顔　博美
今度來た嫁が、と話す涼み臺　德三
涼み臺圖還勇士の聲がする　紫月
夕涼み若い娘は見送られ　明水
夕涼み隣の團扇持ち歸り　勇風
警報が傳達される涼み臺　鷹丸
宿直の机並べた涼み臺　笑月
足音は又止らずに過ぎて行き　風葉
消えかゝる虹を寫した水溜り　潮花
喜びがあるらし二階へ灯をともし　綠翠
別莊の二階まともに海が見え　万的
二階から女の聲で斷られ　水客
相談が濟んだか二階手をならし　紫香
山の宿脂粉も匂ふ貸浴衣　良
古浴衣若い頃をば思ひ出し　儀市
其の王手待つたと浴衣の腕まくり　松葉
制服に着替へ浴衣はぶら下り　仙人
至上論浴衣の父もいけるロ　鮎美
屋臺店歸れば派手な生活向き　利生
配給が赤字出させた生活向き　同
生活費引けば何んにも殘りません　路生
生活費闇で買うには足りぬ金　路郎
生きるために女房の里があてにされ　同
その額は云はずに食ッチョンと云ふ　同

阪大川柳會（大阪）

七月二十四日　利生報

病院の歷史首相もこゝで死に　春巢
腦病院見舞は景色見て歸り　同
病院に母掃除婦として勤め　柳秀
病院を信じて財布してやられ　同
先生たはりますやろかと兒を抱へ　利生
病院の窓から動く世を眺め　同
驛長の制帽着ればまだ若し　春巢
涼しおまっちと丸刈の氣も知らず　同
獅子身中の虫と思へぬ美しさ　柳秀
お向ひの生活何處から金が來る　利生
生活費に觸れず月給きめられる　路生
生活費妻バチ〳〵とはじいてる　同
生計をあんじて父は酒を絕ち　柳秀
生活費何處から來るか子は知らず　利生
儲けたらエイヤないかと酒を呑み　柳秀

警察病院川柳會（大阪）

八月十一日　正柳報

申譯のやうに洋室ついて居り　青柳
洋間から疊へ來れば轉びたし　同
心境の變化洋室ぶち毀し　正柳
洋室にワインの棚も據えてあり　同
ほて貼りの洋間に若き夫婦居る　同
洋室に疊をひけと祖母の云ふ　吉郎
スリッパが二足揃へてある洋間　同
クッションに埋れて永く待たされる　道朗
洋間ありとあるがやつぱり長屋なり　同
洋室は子併の部屋になつちまひ　柳一
洋室に自分の似顔掛けて置き　同
洋室へ彈かぬピアノも置いてあり　柳峯
洋室に故郷の親爺が固くなり　浩
洋室に誰が讀むのか「捕物帖」　同
洋室と云へど机と椅子ばかり　同
戀もしたい娘にオッサンと呼ばれる　五柳
中年の夢で名取りに未だなれず　同
アッパッパ若さ忘れた姿なり　好平
鰐革も中年でこそ持てたもの　道朗
四十腰ですよと轉くあしらはれ　吉郎
爭へぬ中年向が似合ひ出し　正柳
中年になつてもやつぱり二階に居　正朗
中年になつても悔みまだ云へず　道朗
女性觀四十にして又揺ぎ　湧三
中年になつて初婚を諦める　久郎
老婦人中年向の前に立ち　文龍
病院のどつかで中將湯香ひ　正柳
朝顔もへちまも塀越す隣組　久郎
西瓜らしい荷物へ座席譲られず　青柳
夾竹桃銃後驟つやうに咲き　同
初婚とは法律上のことでした　久郎

英靈を迎へて（一句）

とこしへに鎭まる神はわが子たり　好平
だつこした子供に墨子おさえられ　一艸
氣にしてるホクロと知らず話題にし　五柳
襟足の黑子へ廻人夢多く　湧三
その顔へつけ黑子でもあるまいか　同
黑子にも多少の惱み持つて居り　雨聲
そのホクロ伊藤公にもあつたがね　五柳
妖婦型とは知らぬらしつけぼくろ　文龍
暈ね人ほくろの位置も書いてある　同

松坂倶樂部川柳會（大阪）

七月五日　白面人報

発狀をしつかり汗の手に握り　生々庵
汗を拭く態で涙もふいておき　同
親の汗だつたを四十過ぎて知り　同
大仰に汗をふきふき禮を待ち　同
愚痴を云ふ暇に一汗かいて見な　同
外勤の友は汗代欲しと云ふ　正太郎
汗なんか構つて居れず大ヂョッキ　曹天
もう汗も潤れたと八十手をたがめ　同
大映しやがて額に汗が浮き　伊太古
滿塁へ投手大きく汗を拭き　不二
砲彈を削るバイトに汗が散り　乙平
汗もたく山たす財を喰らうのみ　雅美
汗顔の至りと云うて濟ましてゐ　同
氷屋の汗が氷の上に落ち　翠光
ブキテマ高地山下さんの汗撮る　孤蓬
汗かきと自稱の友の太り樣　博也
見學は汗へすまなく目をそらし　美奈子
第六感刑事タバコを床へ投げ　不二
見合はして第六感はよしと言ふ　乙平
塵箱へ首相六感働かせ　同
六感が働き過ぎて嫌がられ　伊太古

押買りと見て奥さんを留守にする　曹天
無心とでも見たか主人に遇はせない　同
曲り角めくらの勘が　チト違ひ　同
連れ込みと脱んで帳場如才なし　同
第六感親展とあらうがあるまいが　生々庵
爭へぬ血のつながつた胸騒ぎ　同
ポチ袋第六感で禮を云ひ　同
何かあると思ふ友なり默してる　正太郎
六感が當り眞面目な顏になり　博也
勘のいゝ嫁は姑の胸にすみ　美根子
勘どころ押へてるよなとりまわし　同
勘で書く便り留守宅泣される　翠光
うなづいて後を見送る刑事の瞳　同　香林坊
合併かどうのこうのと恐がらせ　香林坊
大休止書寢へ歩哨配置する　不二
水道を出て船長も午睡なり　曹天
親分も書寢の顏は罪がなし　白面人
六時迄寢ると書寢も腹がへり　同
風通し選つて枕をもち歩き　翠光
書寢など樂にならぬ若さなり　正太郎
命令で海軍書寢するそうだ　孤蓬
合併の話が書寢ゆり起し　香林坊
拾疊へ書寢をしてる歸省の子　不二
たしなみは團扇の顏のひるねなり　美根子
子の書寢強い兵士になる書寢　博也
いゝよ！〳〵妻の書寢をそつとおき　生々庵
扇風機書寢の父に横取られ　翠光
久し振り踏つた家でする書寢　博也
子の書寢この間と母の繰がけ　美奈子
ひるねざめ硯蓋板をよまされる　美根子
書寢また鯉たゝきをば引寄せる　白面人
西陽除けていつか書寢は向きを變へ　同
不機嫌は書寢の足らぬせいと知れ　生々庵
珍客へ書寢の鼻をつまゝれる　翠光
水泳の夢か書寢の子の動き　雅美
削線に濟まぬひるねと思へども　美根子
書寢の間世界の地圖の色變り　乙平
儲からぬ話へ書寢起される　翠光
儲けてる書寢仲々起きて來ず　香林坊

有恒倶樂部川柳會（大阪）

七月二十三日　銳々報

ワンピース下着の裾を又出して　青美
堂々としてワンピース下駄で行き　德二
母も妻も嫁も娘もワンピース　雨月
書籍部で時間忘れたワンピース　萬雷
ワンピース白粉のない美くしさ　同
ワンピース膝に神皇正統記　同
參觀の母また若しワンピース　同
配給へ隣近所のワンピース　同
ワンピース吹かれるやうに走つて來　銳々
ワンピース月を仰げば猶細し　同
ワンピースハンドバックが大き過ぎ　同
子が二人あるとは見えぬワンピース　同
ワンピースビールも少し飲める也　同
下駄履きで風呂屋へ行くワンピース　同
どの孫も祖母のきらひなワンピース　路郎
母なきあとを母に代つたワンピース　同
朝刀であり銃であるわが首相なり　青美
朝刀をかくさずほどのいぢらしさ　行人
とぎ上げた朝刀さてといふ構へ　波夢造
日焦けした旅の法主のお朝刀　行三
朝刀と言はれて休職官吏なり　同
朝刀の仇名で專務まで上り　銳々
朝刀をあはや坊やが掴みかけ　同
せつかち屋朝刀傷で今日も來る　同
朝刀へ歌麿ゑがく首が延び　萬雷
朝刀がほくろのとこで止るなり　同
朝刀を忘れとくので劇になり　同
朝刀のある日手ごわき髭に會ひ　同
もうすぐと逆朝になる水をつけ　同
筆無精では濟まされぬ慰問文　行人
筆無精で通す無筆の立志傳　行三
借金の斷りにだけ筆を取り　銳々
書かせたら意外にうまい筆無精　青美
筆無精齲取る親を案じさせ　同　波夢造
無無精も許されてゐる初年兵　同
筆無精こんど遇ふたら詫びる氣の　同
筆無精今日も理窟をつけて止め　同
かはらずに居れば居るほど筆無精　萬雷
筆無精から來た封をこはく切り　同
葉書でもよいとは筆無精と見られ　同
來信はよろこんで讀む筆無精　同
有難く思つて居れど筆無精　同
青美氏令孃の結婚を祝して
苺ミルク二人でわける灯が明かい　銳々
花嫁へもう國策を言ひ立てる　同　萬雷
すでにはや夫婦隨の浴衣がけ　萬雷
うつし植ゑて庭の廣さを知る君か　路郎

大阪遞信病院川柳會（大阪）

七月　沒食子報

極道が窓の口から誘ひに來　司白
窓口は少さく巨萬を取引し　沒食子
開幕のベルに窓口忙しい　竹莊
窓口で男をあげた一萬圓　方正
窓口に座らすだけでよい男　同
賣切れで窓口閉まるあはらしさ　晴夫
窓口は闇で儲けたとも知らず　沒食子
窓口へいつち美人が坐らされ　方正
窓口でたしか一錢落ちた音　喜由
窓口は百圓札を持てあまし　晴夫
窓口の返事したゝほつとかれ　喜由
窓口で子に差出さす處方箋　同
凡人の弱さ心も共に病み　同
こじらして來て治る日を聞きたがり　同
虫籠を吊つて屋臺のひやしあめ　方正
電話帳捜すは情人でたかりけり　同
ルンペンも影を潜めた大東亞　獨樂
鮎狩りに土產の鮎は別に買ひ　竹莊
常會も貯金のことで幕をとぢ　司白
小兒科は泣く事にきめ脈を見る　竹莊
病院の庭に淋しい萩の花　美代子
金持の病院暮しとは哀れ　沒食子
足音も病院らしい音になり　竹莊
儲けてる證據病室增築し　沒食子
病院へその終止符を打たれに來　方正
出這りが繁く特等御重態　同
病院の臭ひを持つて歸つて來　沒食子
看護婦も一緒に撮す退院日　竹莊
病院の空地利用も戰時なり　矢野
病院が好きで來るのもありはあり　卓二
戰傷兵母の手紙を伏し拜み　同
病床につゞる日記は戰果から　竹莊
病院へ見舞お米に喫斗をつけ　喜由
八月十五日
取引がすむまで世辭を言ひつゞけ　竹莊
買はされたあとでお世辭を思ひ出し　同
言ひ直すお世辭けどうもピンとこず　晴夫
綺麗よし窓口だけで惜しい世辭　方正
如才ない世辭新任は苦勞人　沒食子
警戒を要する世辭を受け流し　同
逆境が生むひつつけた樣な世辭　同
癸轉はみんなの世辭を聞き流し　同
社長室世辭とお辭儀で引下り　晴夫
高等官新任の味旅で知る　獨樂
新任へ日記の頁ちとたらず　竹莊
陽燒した新任少してごはそう　方正
新任は古い頭を笑つとき　喜由
新任へ共鳴をする趣味を聞き　同
新任は社長閥なり東大出　沒食子
新任は蛟龍時を得たかたち　同
こせついて新任そう〳〵嫌がられ　同
新任は定評のある敬神家　竹莊
新任に先祖の事も一寸出る　竹莊
新任は先づ印鑑を作らされ　卓二
かしこくも野戰料理を召上る　晴夫
割安で濟んで料理も酒もほめ　沒食子

ヴイタミンA壞すまいと茄で足らずおごらせるつもり定食注文し　竹莊
未だ動く海老か自慢の繩暖簾　同
夏やせの刺身殘して笑はれる　同
ホルモン料理捨てるとこまで食はすなり　喜由
お料理が出來て細君顏を出し　方正
料理部はもうやまにして流す音　沒食子
心配をかくすを母は淋しがり　喜由
この暑さとこで着るのか上衣さげ　方正

非特異性全免疫元
オムニコンメツト
本劑は非特異免疫學說に準據して高度の免疫力を有する異種蛋白、リポイド及び脂肪を主体とせるものなり。
（適應症拔萃）
流感、各種肺炎、肋（膜）膜炎、扁桃腺炎、中耳炎、蓄膿症、其他各科、急性、熱性、炎衝性、傳染性、敗血性、並に化膿性諸疾患に對し廣汎に渉り著効を奏す。
（特長）
注射無痛、副作用絕無、用法簡單、奏効迅速、價格至廉。
（包装）
二c.c.管入　二〇c.c.
二五c.c.管入　二〇c.c.入
一〇c.c.管入　一〇c.c.管入
發賣元　株式會社　黑田藥品商會
大阪・東京
—文獻圖呈—

女客遠慮しながら箸を割り　竹莊
カロリーがどうのこうのと婦人會　同

住友有信川柳會（尼崎）

七月三十一日　文月報

大掃除氷屋早く濟して居　中原
夕立に氷の客はぐつとへり　福田
吹きながら喰べるてもありかき氷　森
統制へ氷の蜜も我慢しよう　路風
氷割る音に病人時刻きき　大仁
夏休少し足りない貯金帖　文月
夏休取る頃涼風吹き初め　泣虫
夏休第一信に力入れ　研作
日やけした兒をみちがへる罰學期　藤田
夏休よくやけたなとほめられる　岡本
この年になつても嬉し夏休　福田
夏休せみととんぼに日が暮れる　岡
大掃除を豫定に入れた夏休み　路風

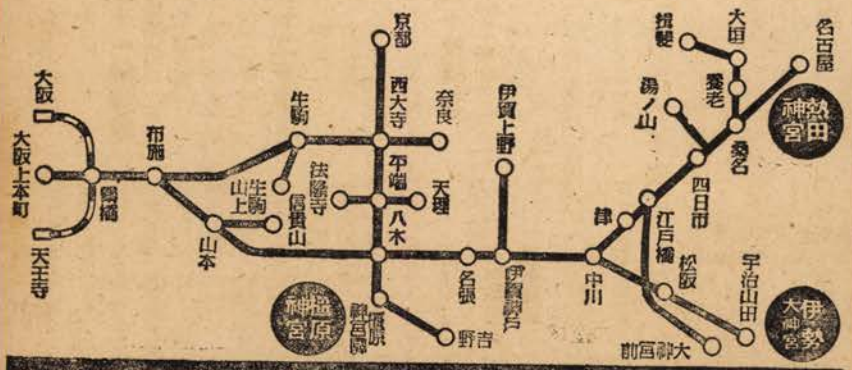
徐州川柳會（徐州）

五月二十四日　ひろし報

安產のウナを圍んで嫁の里　雨町
初產の嬉しさ近い里を持ち　寬延
艦長の名前を知らず艦を賞め　三草
印度洋いまだ世界の的にあり　鶴城
神助だと床しさ見せる眞珠灣　雲亭
三男は海軍さんと遺兒の母　ひろし

敬神崇祖　心身錬成　重要交通路

伊勢大神宮、熱田神宮、橿原神宮、神武天皇御陵をはじめ奉り數多くの御陵墓、枚岡神社、奈良春日神社、石上神宮、大和神社、大神神社、吉野神宮、丹生川上神社（上・中・下社）談山神社等の官幣社ほか御由緒深き神社への光榮ある參拜路であります
神武天皇大和御平定の聖蹟をはじめ、飛鳥奈良朝時代の文化を物語る遺蹟下りては吉野朝幾多忠臣の史蹟、奈良吉野、多武峯、室生寺、赤目四十八瀧、香落溪、養老等の名勝に一般向鍛錬道場としてのハイキングコースがあります
信貴生駒縱走、枚岡公園—生駒山上攝河眺展望コース、平城史蹟めぐり、飛鳥史蹟めぐり、多武峯より石舞臺・岡寺へ、三輪より石上神宮・天理へ、赤目四十八瀧より香落溪へ、その他奈良、吉野、生駒山脈を中心として數多くの優秀コースがあります
大軌と參急電鐵とが合併して全營業路線に四三八粁、これに直營バス及傍系の電車バスを加ふる時は一千粁を超え、大阪、奈良、三重、愛知、岐阜の一府四縣に跨り交通産業に緊密な關係を有する重要な任務を擔うてゐます



關西急行鐵道
（旧名 大軌・參急電鐵）

社關係人々

主幹

麻生路郎

賛助員

池澤樂居　長谷川一徹　大道弘雄　岡本一平　篠原春雨　片岡直方　笠原路生　嘉納純　田中辰二　長崎柳秀　長岡半太郎　長野晴濱　藤村作　藤本卯之助　頭原退藏　西田一　浅田一　末弘巖太郎

客員

島山一歩　沖野岩三郎　大島瀧明　大谷五花村　亀井哉修　川村花菱　米村あん馬　田村孝之介　谷脇素文　高尾亮雄　生方敏郎　窪田銀波樓　山本雨迷　安川久留美　前田五健　柴谷宰二郎　篠原春雨　蛭子省二　藤里好古　森東魚

不朽洞會員

橋本綠雨　高橋かほる　福田山雨樓　西田艸樂　永田里十九　奥村丹路　岩崎柳路　寺井銳々　大西八歩　高澤一浪　戸田孤篷　石井白面人　川出美根子　中島生々庵　戸倉曹天　古川風竹　前山北海　古川麗花麗　岩崎山石　藤井友郎　米本貴志子　内藤草一郎　三輪晩翠　水谷鮎美　大坂形水　田中雨月　平佐平三　橋本波夢造　藤岡至藝瑠　西川青美　米本儀助　吉田萬雷

★

村松夢裡　市場沒食子　吉田水車　妹尾八九滿　宮岡白峰　須崎豆秋　石曾根民郎　濱田賢次　大森風來子　鈴木九坡　福井哲　水谷竹莊　長野井蛙　村上角堂　松浦帆船　小川靜觀堂　田邊由布　長谷川三司　野元吐空　月原胥明　高田抱遜　國弘半休　篠山籌彦　岩崎水虹　阿萬萬的　谷川綠風　小林文月　酒井美知夫　飯尾害興史　小川恒明　野口柳太　浪玲之介　河野夜玉　德永雅美　谷口綠葉　武部香林坊　河田一將　井上湧三　八竹正柳　上田翠光　明石柳次　中内翠芳　多田市多樓　濱田賢次　大森風來子　鈴木九坡　福井哲　松浦帆船　小川靜觀堂　田邊由布　長谷川三司　野元吐空　岩崎松代　北川春巢　布施筑川　尾崎方正　佐竹香附子　押谷たけを　關根山彦　西尾葉　櫻川不水　田中風葉　中原銑人　濱田久米雄　好崎申仙　杉原大研子　菊澤小松園　魚住滿潮　清水友帆　清水史路　清水白柳子　小畑自有浪　西川愁水　井上湧三　河田一將　上田翠光　武部香林坊　谷口綠葉　德永雅美　小林文月　阿萬萬的　岩崎水虹　篠山籌彦　國弘半休　高田抱遜　月原胥明　北川春巢　布施筑川　尾崎方正　岩崎山石　藤井友郎　米本貴志子　内藤草一郎　三輪晩翠　水谷鮎美　大坂形水　田中雨月　平佐平三　橋本波夢造　藤岡至藝瑠　西川青美　米本儀助　吉田萬雷　村松夢裡　市場沒食子　吉田水車　妹尾八九滿　宮岡白峰　須崎豆秋　石曾根民郎　濱田賢次　大森風來子　鈴木九坡　福井哲　松浦帆船　小川靜觀堂　田邊由布　長谷川三司　野元吐空　岩崎松代　北川春巢　布施筑川　尾崎方正　佐竹香附子　押谷たけを　關根山彦　西尾葉　櫻川不水　田中風葉　中原銑人　濱田久米雄　好崎申仙　杉原大研子　菊澤小松園　魚住滿潮　清水友帆　清水史路　清水白柳子　小畑自有浪　西川愁水　井上湧三　河田一將　上田翠光　武部香林坊　谷口綠葉　德永雅美　小林文月　阿萬萬的　岩崎水虹　篠山籌彦　國弘半休　高田抱遜　月原胥明　北川春巢　布施筑川　尾崎方正　岩崎山石　藤井友郎　米本貴志子　内藤草一郎　三輪晩翠　水谷鮎美　大坂形水　田中雨月　平佐平三　橋本波夢造　藤岡至藝瑠　西川青美　米本儀助　吉田萬雷　村松夢裡　市場沒食子　吉田水車　妹尾八九滿　宮岡白峰　須崎豆秋　石曾根民郎　濱田賢次　大森風來子　鈴木九坡　福井哲　松浦帆船　小川靜觀堂　田邊由布　長谷川三司　野元吐空　岩崎松代　北川春巢　布施筑川　尾崎方正　佐竹香附子　押谷たけを　關根山彦　西尾葉　櫻川不水　田中風葉　中原銑人　濱田久米雄　好崎申仙　杉原大研子　菊澤小松園　魚住滿潮　清水友帆　清水史路　清水白柳子　小畑自有浪　西川愁水　井上湧三　河田一將　上田翠光　武部香林坊　谷口綠葉　德永雅美　小林文月　阿萬萬的　岩崎水虹　篠山籌彦　國弘半休　高田抱遜　月原胥明　北川春巢　布施筑川　尾崎方正　岩崎山石　藤井友郎　米本貴志子　内藤草一郎　三輪晩翠　水谷鮎美　大坂形水　田中雨月　平佐平三　橋本波夢造　藤岡至藝瑠　西川青美　米本儀助　吉田萬雷　村松夢裡　市場沒食子　吉田水車　妹尾八九滿　宮岡白峰　須崎豆秋　石曾根民郎　濱田賢次　大森風來子　鈴木九坡　福井哲　松浦帆船　小川靜觀堂　田邊由布　長谷川三司　野元吐空　岩崎松代　北川春巢　布施筑川　尾崎方正　佐竹香附子　押谷たけを　關根山彦　西尾葉　櫻川不水　田中風葉　中原銑人　濱田久米雄　好崎申仙　杉原大研子　菊澤小松園　魚住滿潮　清水友帆　清水史路　清水白柳子　小畑自有浪　西川愁水　井上湧三　河田一將　上田翠光　武部香林坊　谷口綠葉　德永雅美　小林文月　阿萬萬的　岩崎水虹　篠山籌彦　國弘半休　高田抱遜　月原胥明　北川春巢　布施筑川　尾崎方正　岩崎山石　藤井友郎　米本貴志子　内藤草一郎　三輪晩翠　水谷鮎美　大坂形水　田中雨月　平佐平三　橋本波夢造　藤岡至藝瑠　西川青美　米本儀助　吉田萬雷　村松夢裡　市場沒食子　吉田水車　妹尾八九滿　宮岡白峰　須崎豆秋　石曾根民郎　濱田賢次　大森風來子　鈴木九坡　福井哲　松浦帆船　小川靜觀堂　田邊由布　長谷川三司　野元吐空　岩崎松代　北川春巢　布施筑川　尾崎方正　佐竹香附子　押谷たけを　關根山彦　西尾葉　櫻川不水　田中風葉　中原銑人　濱田久米雄　好崎申仙　杉原大研子　菊澤小松園　魚住滿潮　清水友帆　清水史路　清水白柳子　小畑自有浪　西川愁水　井上湧三　河田一將　上田翠光　武部香林坊　谷口綠葉　德永雅美　小林文月　阿萬萬的　岩崎水虹　篠山籌彦　國弘半休　高田抱遜　月原胥明　北川春巢　布施筑川　尾崎方正　岩崎山石　藤井友郎　米本貴志子　内藤草一郎　三輪晩翠　水谷鮎美　大坂形水　田中雨月　平佐平三　橋本波夢造　藤岡至藝瑠　西川青美　米本儀助　吉田萬雷　村松夢裡　市場沒食子　吉田水車　妹尾八九滿　宮岡白峰　須崎豆秋　石曾根民郎　濱田賢次　大森風來子　鈴木九坡　福井哲　松浦帆船　小川靜觀堂　田邊由布　長谷川三司　野元吐空　岩崎松代　北川春巢　布施筑川　尾崎方正　佐竹香附子　押谷たけを　關根山彦　西尾葉　櫻川不水　田中風葉　中原銑人　濱田久米雄　好崎申仙　杉原大研子　菊澤小松園　魚住滿潮　清水友帆　清水史路　清水白柳子　小畑自有浪　西川愁水　井上湧三　河田一將　上田翠光　武部香林坊　谷口綠葉　德永雅美　小林文月　阿萬萬的　岩崎水虹　篠山籌彦　國弘半休　高田抱遜　月原胥明　北川春巢　布施筑川　尾崎方正　岩崎山石　藤井友郎　米本貴志子　内藤草一郎　三輪晩翠　水谷鮎美　大坂形水　田中雨月　平佐平三　橋本波夢造　藤岡至藝瑠　西川青美　米本儀助　吉田萬雷　村松夢裡　市場沒食子　吉田水車　妹尾八九滿　宮岡白峰　須崎豆秋　石曾根民郎　濱田賢次　大森風來子　鈴木九坡　福井哲　松浦帆船　小川靜觀堂　田邊由布　長谷川三司　野元吐空

支部と幹事

道頓堀支部（大阪）萬よし　函館支部（函館）晟修　梅田支部（大阪）鮎美　嬢川支部（島根）綠之助　鳥取支部（鳥取）鐵州　松山支部（松山）耕一路　天王寺支部（大阪）八九滿　鶴町支部（大阪）双虎　御池橋支部（大阪）夢裡　松江支部（松江）將雄　大鐵局支部（大阪）柳太　西條支部（愛媛）英賀夫　城南支部（大阪）申仙　今治支部（今治）文庫　川雑光笑會（大阪）里十九　竹原支部（廣島）芳郎　廣島支部（廣島）久米雄　豐中支部（豐中）紫香　下關支部（下關）牟休　北鮮支部（羅津府）美笑　蒙彊支部（張家口）柳路　上海支部（中華）天作　鐵道病院支部（大阪）春巢　櫻島支部（大阪）秀溪　四ツ橋支部（大阪）翠芳　布哇支部（布哇）麗花麗　堺支部（堺）角堂　岡山支部（岡山）九坡　尼崎支部（尼崎）美知夫　日和佐支部（德島縣）賢次　三池染料支部（大牟田）蝶人　大洲支部（愛媛縣）椋影　北郡支部（山口縣）井蛙　熊本支部（熊本）水源　仁多支部（島根縣）一聲　神津支部（大阪）香林坊　津山支部（津山）一將

募集

第十九卷 第十一號課題

九月廿日締切（十句以内）

素足　前田五健選

日記　魚住滿潮選

第十九卷 第十二號課題

十月廿日締切（十句以内）

新刊　石井白面人選

繃帶　尾崎方正選

第二十卷 第一號課題

十一月廿日締切（十句以内）

旅館　岩崎柳路選

詩集　石曾根民郎選

毎號募集（毎月五日締切）

近作柳樽（雑吟廿句）麻生路郎選

川柳塔　麻生路郎選

同舟近詠

各地柳壇（會報）

文章（評論研究感想吟行漫文漫畫）

投稿規定

▲投句は本社發賣の投句用箋、官製葉書又は同型の原稿紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。

▲「近作柳樽」は全作家の雑吟を募る

▲「川柳塔」への投句は不朽洞會員に限る。

▲各地會報は半紙判原稿紙に清記の事。

▲文章は二十字詰原稿紙使用の事。

▲書體はなるべく楷書（川柳雑誌原稿）と封筒に朱記の事。

▲締切は嚴守されたし。

▲投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入の事。

規格判B列5號

川柳雜誌 第十九卷 第九號

毎月一回一日發行

定價

一冊 ㊙ 金三〇錢（送料一錢）

半ケ年・六冊 金一圓八十錢（送料六錢）

一ケ年・十二冊 金三圓六十錢（送料十二錢）

外國送本には海外郵送料實費の加算を乞ふ

御註文はすべて前金で願ひます。振替（大阪七五〇五〇）又は小爲替を御利用願ひます。御註文は何月號よりと御指示願ひます。轉居又は改號等の節は爲新併記の事。

昭和十七年八月廿五日印刷

昭和十七年九月一日發行

禁無斷轉載　本誌の刊行は有保證新聞紙法に據る

廣告　本誌廣告に御用の節は川柳雜誌社廣告部へ御一報下さいますやう。

日本出版文化協會會員番號 五八〇四壹壹號

發行所　川柳雜誌社　大阪市西區江戸堀上通二丁目四六番地（昭和ビル）振替（大阪）七五〇五〇　電話土佐堀 八一一六 三三三四番

編輯兼發行印刷人　麻生幸二郎　東京市神田區淡路町二丁目九番地

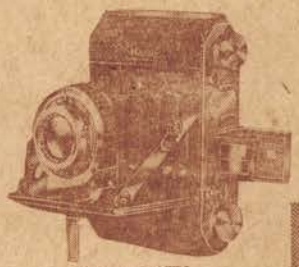
配給元　日本出版配給株式會社

★毎號、戰線の勇士に送られたい方は部隊名をお示しの上本社宛に御申込み下されば郵税を奉仕して直接發送致します。

送本者　住所　氏名

セミ・ミノルタ

代表的國産カメラ



ブロニー
16枚撮り

II型F4.5付
¥117.00

F3.5付
¥141.00

距離計
¥21.00

（カタログ呈 要郵券十錢）

淺沼商會大阪支店

大阪市南區順慶町四丁目
電話船場905・1905・1396・5095番

ガラス壜代用 紙容器

金屬代用紙罐
紙コップ

丸形・角形・小判形・組立式各種・藥品・食料品・菓子等の容器として最適

二葉屋商店

大阪市住吉區晴明通一丁目四〇番地
電話事務所用 天下茶屋 五八〇二番
工場用 同 五八〇〇三番 五八〇〇四番

安産のために

妊娠としての大切な責任はカルシュームを補給して諸病を防ぎ、子宮の收縮を容易ならしめ「安産」へ導くことにあります。

ワダカルシューム錠

大阪道修町 和田卯助商店

片瀬醫學博士述「安産のために」冊子呈上

樹林醫學博士 推奨
片瀬醫學博士 監査

東口 スピーザ

ワイシャツ
婦人服地
其の他

大阪市北浜二丁目 片倉ビル
電話北浜(23)六六三六番(4)

SENRYU ZASSHI No・224
Published monthly by the Senryu Zasshisha, Osaka, Nippon.

細菌性・化膿性疾患に
テラポール錠

感冒・扁桃腺炎・中耳炎・尿路疾患・丹毒・肺炎・齒槽膿漏婦人科疾患・面疔・其の他細菌性疾患に

THERAPO
TABLETS
テラポール
Each tablet contains 0.3g para-
benzolsulfonamid
DOSE: 1-2 tablets daily thrice
HARK
第一製薬株式會社